

---

**『小説家になろう』でうんこと言う作品を書いたが私は天才である**

メタかつ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『小説家になろう』でうんこと言う作品を書いたが私は天才である

### 【Nコード】

N7330D

### 【作者名】

メタかつ

### 【あらすじ】

天才作家新渡戸寅ノ助：彼は世間から天才と評される人物である。彼の作品は哲学じみた難しい作品ばかりで世間受けはしない…だが彼にはもう一つの顔『小説家になろう』での顔がある。彼のこのサイトでの作品は…

## 第1話 我が輩は天才である…

煌びやかな照明が光る会場、何百人と言う観客が次に登場する人物を固唾を飲んで見守っている。観客はみなスーツに着飾り独特な緊張感が漂っている…

舞台袖には男が1人…目を閉じ、腕を組む…周囲は只ならぬ雰囲気<sup>にやみくらみすけ</sup>を醸し出している。

この男こそが本編の主人公、新渡戸寅ノ助である。

周囲は寅ノ助の出番が近ずき慌ただしくなってきた…肝心の寅ノ助はというと未だ目を閉じ動く気配さえない…

この新渡戸寅ノ助、一言で言うと天才である。現役の京都大学文学部教授、現役の天才作家であるさらにバイオリン、ピアノもソロコンサートを開く程の腕前。絵画にいたっては個展を開く程である。今日は芥川賞の授賞式にやってきたのだ。寅ノ助にとっては大したことではない…もはや授賞式の常連となっている。

「では芥川賞授賞作品『人間の本能と遺伝』…の作者である新渡戸寅ノ助先生の登場です」

アナウンサーが緊張した声で言った。周囲もこの独特な緊張感がさらに高まる…時間にして数秒だったと思う。寅ノ助はゆっくりと目を上げ立ち上がる…この雄大さにスタッフは見とれてしまう。天才とはこういうった者かもしれない。

寅ノ助はゆっくり、ゆっくりと歩を進める…舞台上上がった時には観客の興奮は最高潮に達した

それまでざわついていた会場がひとつになった。誰も口を開けるこ

とできない…アナウンサーさへも新渡戸寅ノ助と言う男に見とれていた。

「初めまして新渡戸寅ノ助です」

寅ノ助が一言挨拶。それまで寅ノ助に見とれていたアナウンサー（女子アナ）が我に帰る。

「あ、初めまして！平井です！えゝ授賞作品『人間の本能と遺伝』と言う難しいテーマなのですが何故このようなテーマを書くと思ったのですか？」

「人と動物の違いをあげるとすれば理性です。そして人を突き詰めていけば遺伝子にぶつかる…私はね猿から人間に移るとき理性がどの様に生まれたのか遺伝子レベルで考えたのです…」

平井アナはもととアホである。新渡戸の言っていることを理解など出来ない。と言うか生まれてこの方本を読んだことがない。顔だけで女子アナになった人間である。なぜ授賞式の司会を担当することになったのかは謎である。

「む、難しいですねゝ…えゝ次に質問なのですが、次回作はどういったテーマを考えていますか？」

「………そうですね…次回作は独裁者の心理を突き詰めていきたいと思っています…」

さらに質問を続ける…

「えゝ次の質問なんですが先生の好きな言葉は何ですか？」

「…我思ふ故に我あり…これはデカルトの言葉なのですが自分とは  
どういう人間か考えないと自分が存在しない…好きですねこの言葉」

「……………」

「リオッチ難し過ぎてわかんない プンポン」

「……………」

「……………」

静まり返る会場…

ブンブンなどやっていい空気ではない…

だが仕方がない事なのだ…平井アナはアホなのだから…

今風に言つと…

K Y

平井アナは自分がK Yとも理解出来ない…仕方のない事なのだ平井アナはアホであるから…この授賞式では平井アナのアホさが再確認された…それだけだ…

「お帰りなさいませ」

「うむ…」

寅ノ助は授賞式の後すぐに自宅に戻った。寅ノ助は大金持ちであるが妻はいないずっと独身である日常の生活はお手伝いさんに任せてある。

「風呂は後ではいる、部屋には誰も通すな」

「かしこまりました」

いつもと同じセリフである。寅ノ助は必要以上に会話はしない。こ

のお手伝いさんとは10年以上の付き合いではあるが会話と言う会話をしたことがない…寅ノ助とはそう言う人間である。

寅ノ助は書斎にこもり部屋着である浴衣に着替えた。椅子に座り真剣な表情で何か一点を見つめている…その表情は鬼気迫るものである…

何を見ていると思う？

パソコンである。それだけなら大したことではない…問題は中身だ…

『小説家になろう』…そうこのサイトを見ているのだ。それだけならプロの作家がアマチュアの作品を見る…それほど驚く物ではない…

だが寅ノ助はキーボードを打ち込んでいる。携帯小説を執筆しているのだ。これだけでは大した問題ではない…問題は中身である。

1時間程たった時、寅ノ助の指はキーボードから離れた。

「ふっ…素晴らしい最高傑作ができた…」

寅ノ助は人に見せることのない笑顔で画面をニヤニヤと見つめている…プロの作家で芥川賞授賞者の最高傑作とは？

一応ここに印しておこう…

題名『うんこ』

うんこうんこ！うんこ食べたい！うんこうんこうんこうんこうんこうん

こっくんこっくんこっくんこっくんこっく〜んこ！たたたたた  
食べたい！うんこっくくくくくくくくくくくくくくくくく  
うんこっくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

以下省略

新渡戸寅ノ助は満足そうにパソコン画面を覗いていたのだった：



## 第2話 天才作家、主食ポコチン先生

現代の宝、芥川賞授賞作家、新渡戸寅ノ助…信じられるだろうか？  
生きる文豪とまで賞される作家の携帯作品が『うんこ』と言うタイトルであり起承転結もなく下ネタを並べただけの愚作だということ…  
…さらに寅ノ助は最高傑作と賞し満足感に浸っていると言うこと…  
…ちなみに携帯小説での作者名は『主食ポコチン先生』である…

そして『うんこ』と言う作品を投稿してから数分後、数々の評価感想が来た…ここに少し抜粋していく。

名前：メタカツ

死ねキチガイ！てめゝが小説サイトいること事態が気に入らない！  
小説の基礎とかそれ以前の問題だ！

文章

作品

名前：嵐

くだらない事書く暇あったら他にやることないのですか？こんな事  
して楽しいですか？

文章

作品

名前：ハンバーガー先生読んでいて吐き気がしました…あなた小学生  
ですか？ちゃんと勉強しようね

文章

作品

数々の批判意見ばかりである…これも今に始まったことではない寅

ノ助がかく携帯小説は基本的に下ネタしかない…いつもこういった批判意見がくる。この批判意見を送った人達は夢にも思わないだろう『主食ポコチン先生』と新渡戸寅ノ助が同一人物だと…

「ふふ…下等な人間達には分からないかこの作品の深さを…」

寅ノ助は1人ブツブツ言いながらキーボードを叩く。評価感想をくれた人たちひとりひとりに律儀に返信するのだ。  
例えば…

返信コメント

メタカツ先生様ご丁寧な評価ありがとうございます。誠に恐縮ですが私、主食ポコチンは一応プロの作家でありまして小説の基礎は出ていると思っています。少なくともあなた様のような趣味で小説書いている方よりは…

私はこの作品を通して排泄の持つ行為の意味を上げたのですが理解出来なかったようで…

名前：主食ポコチン先生

寅ノ助はいたってマジメである。しかしメタカツからはさらに批判メールが送られる…こんな事を夜中繰り返していた…この時間が寅ノ助にとって心休まる時間であった…携帯小説を書いているときだけは文豪、新渡戸寅ノ助から解放される至福の時である…

翌朝

寅ノ助はいつものように7時に起床し浴衣からスーツに着替えリビングに向かう。

「おはようございます」

「うむ…」

リビングにはすでに食事が用意されお手伝いさんが立っていた。いつものように無言で食べる…寅ノ助は食事を終えると歯を磨きヒゲの手入れを行う。そして8時が過ぎた頃自宅をでる。

「いつもの時間に帰ってくる」

「はい、いつてらっしゃいませ」

新渡戸寅ノ助は芥川賞授賞作家であり現役の京都大学の教授でもあるのだ。毎日京大にて講義をする。主に文学と心理学であるのだが…正直寅ノ助の講義は人気がない、眠くなるのだ余りにも難しすぎて…京都大学の学生さえも理解に苦しむ講義である。今まで挫折と言つのを味わったことのない学生らはこの時初めて敗北感を知る…

世の中には上には上がいる天才がいるのだと…

そしてこの頃京大ではある事件が話題になっていた…

「今度は佐々木がやられたらしいぜー！」

「えー佐々木君が？これで5件めじゃん…京大に何か恨みがあるものの犯行かな？」

「さあな〜でもリンチなんて卑怯だよな〜……………あつところでさっき新渡戸の講義だったんだけどやっぱ理解できん！芥川賞かなんか

知らんけどわかる講義してほしいよな」

「……ふん…そうなんだ…小倉君夜道には気を付けなよ…」

小倉と言う男は笑って帰っていった。小倉と話していた女性…岩井ゆきと言う。先程まで笑顔で話していた彼女であるが今は冷徹な悪魔のような表情をしている…そして誰にも聞こえないような声で呟いた…

「私の寅様…侮辱するやつは許せない」…つと。

### 第3話 大好き寅様！前編

白いスカートに黄色いガーディガン。髪は黒くパーマが掛かっているのか巻き髪である。肌は透き通っているかのような純白の白。どこからどうみてもお嬢様のような雰囲気醸し出している。

この女岩井ゆきと言う。京都大学きつての才女として知られ語学堪能、成績は常にトップクラスである。だがゆきの裏の顔を誰も知らない…

この時期、京大では夜何者かによって学生がリンチにあい重症を負う、と言う事件が多発している。警察も動いているのだが被害者の共通点も無く恨みを買った覚えも無いと言うことで捜査は困難を極めていた。

この事件の真相を知るものは誰もいない…なぜならある時期をさかえにパタツと犯行が無くなってしまったからだ…犯人が捕まることなく…

「ドアにご注意ください」ドアにご注意ください」

岩井ゆきは学校帰りいつもの電車、いつもの座席に座っていた。目を閉じウォークマンを聞き入っている。別に音楽が聞きたいわけではないただ下等な人間の声を聞きたくないだけだ。ゆきは周りを見渡す……

『ふっ…地べたなんか座ったりして本当低レベルなこと…』

『あら？あちらではクソガキが走り回ってるわ…IQ低くて呆れちゃうわね…』

『あゝ嫌嫌！こんな下等な人間共と一緒に空気吸うのも嫌だわ…』

いつもゆきはこんな事を思いながら帰宅する。電車で揺られる事30分、ようやく解放される。帰り際コンビニによりお弁当を購入…お釣りを貰うとき定員の手が触れたので洗剤で綺麗に洗う。ちなみにゆきは1人暮らしである。

ゆきの住まいは駅から比較的ちかい。家賃、食費、学費は全て親からの仕送りを受け取っている。

上京して初めての1人暮らしである…最初はやっぱり寂しかった…でも今は寂しくない…彼が待っているからだ。ゆきはドアを開けると満面の笑みをした。

「ただいま…」

「……………」

「……………」

返事はない。

「……………」

「ただいま寅様…」

寅様とは新渡戸寅ノ助にんとくすけのすけの事である。だがこの部屋に新渡戸寅ノ助はいない。ただ何千枚にもなろうという寅ノ助の写真が部屋中に張ら

れている。壁、台所、風呂場、トイレ、テーブル、椅子にいたるまで全てである。

隙間なく敷き詰められた写真は不気味意外なにもものでもない…

「寅様この唐揚げおいしいよ はい あ〜ん」

ゆきは写真の寅ノ助の口に唐揚げを押し込む。当然食べるわけがない

「きゃ〜 今トイレだよ〜エッチ〜」

トイレの中の寅ノ助の写真に話しかける…

「寅様〜 いい湯加減〜」

ゆきは部屋にいる間中、1人でブツブツ寅ノ助の写真に話しかける。あんな中年男どこがいいのか私には分からないただ寅ノ助は昔からモテた。男には分からない魅力があるのだろう。

話を戻して岩井ゆきだ。これだけならただの変わり者、変態、キチガイで終わるかもしれない。問題はここからである。

時刻は22時を回った。ゆきは誰かに電話をしているようだ…

「奴隷1号、次のターゲット決まったわよ…」

「はい嬢王様！ターゲットは誰でしょうか？」

「ふふふ…よく聞きなさい…文学部4年、小倉直樹よ…あの男私の寅様を『芥川賞か何か知らんけど分かる講義してほしいよな〜』」

ってバカにしたのよ！やっておしまい！」

「はい嬢王様！今からランチしてきます！」

ゆきは携帯電話を切り、ベッドで横になった。そして寅ノ助の写真に接吻して眠りについたのだった…

「愛してるよ…寅様…」

ゆきは寝言で寅ノ助に対する愛のささやきを呪文のように繰り返しながら深い睡眠へと向かうのであった…



### 第3話 大好き寅様！中編

「え〜！今度は文学部の小倉君がやられたって〜え〜！」

「そうなのよゆきちゃん…これで8件めよ…やっぱり京大に恨みがある人の犯行かなあ…例えば京大を受けたけど落ちて京大生に逆恨みとか…」

「きゃ〜怖い怖い！」

岩井ゆきは学校の昼休憩、友人等と談笑している。やはり会話の中心は京大生リンチ事件である。もう学校中この話題で持ちきりである。

学生等は夢にも思わないだろう、この京大生リンチ事件の黒幕は岩井ゆきだと言うことを…そしてこの事件は1人の京大生岩井ゆきの歪んだ欲望だけで成り立っていると言うことを…

どうでも良いことだが男性の視線が気になる。皆ゆきを見ているのだ。ゆきは元々小柄でいつもお嬢様チックな服装をしているとても可愛い女性だ。学校では恥ずかしがり屋のお嬢様で通っている。京大のアイドル的存在なのだ…

「ん？」

1人の友人が気づく

「ゆきちゃん携帯ブルッてるよ」

「え？あつ本当だ…」

ゆきは携帯をちらりと見た。ある人からの電話である。一瞬険しい表情になるがすぐに笑顔に戻る

「ごめんね、電話だ…ちょっと待っててね」

「ヒューヒュー男かな男かな？」

友人は悪戯をするようにゆきをおちよくる。ゆきは照れながら違うよゝと言っている…非常に微笑ましい光景である。どこにでもある友人との会話だ…だが食堂を出た時のゆきの表情は違っていた。人前で見せる明るいお嬢様ではない、冷徹な悪魔のような表情をしている。

ゆきは人目を気にし非常階段までやって来る…辺りを見渡す、誰もいる気配はないようだ。そっと携帯電話を耳に当てる。

「何？奴隷１号…学校内では連絡してこないでちょうだい！」

「あつ…いや…その…」

奴隷１号とは京大いちのブ男として知られる馬鹿田阿呆助である。ばかたあほすけ

馬鹿田は岩井ゆきが好きなのだ。まるで月とすっぽんである。ゆきにとつては馬鹿田と知り合いたと断じて知られたくはなかった…

そして馬鹿田だけがゆきが新渡戸寅ノ助に好意を寄せていると知っている…

なぜかって？それは馬鹿田のストーカー行為の果てに知り得た情報だからだ。馬鹿田はゆきの望むことなら何でもする。奴隷と言われてもかまわない。大好きなゆきがアイツをボコれ！…と言われれば喜んでボコる…好きな人の望むとおりにしてあげたい。馬鹿田はそう思っていた。どんなに嫌われても構わなかった…

しかしゆきは携帯を片手に明らかに不機嫌そうな態度をとっているのだった。

「で？用があるのか無いのかハッキリして！切るよ！」

「待つて！…え〜と…僕は…あう…」

「言いたいことあるなら早く言って！」

「あうう…僕は…嬢王様の…う」

「で？」

「ウンコが食べたい！」

ツーツー…

電話は切れた。

当然である。

女の子に向かってウンコが食べたい？…嫌われて当然のセリフである。

だが馬鹿田は何故電話を切られたのか理解できない。

好きな人のウンコが食べたい…当然だろ？これは余談だがカリバリズムと食便の持つ意味合いは似ているらしい。人食はその人を食べることによって身も心もひとつになる…といった意味を持つ。食便もその人の汚物を食す事によって身も心もひとつになる…まあ馬鹿田がここまで考えているかは疑問ではあるが…

この京大生リンチ事件の真相はゆきがターゲットを馬鹿田に伝え馬鹿田が大金を払ってヤンキーに依頼する。そしてヤンキーがリンチを実行する。真相はこんな所だ。

岩井ゆきも馬鹿田阿呆助も実際のリンチには何ら関わっていない。馬鹿田とヤンキーの繋がりも実際にはない。馬鹿田は面識の無いその辺のヤンキーを捕まえて金を払っているだけだった。

犯人は捕まらない。警察も全く繋がりを見いだせないでいた。京大生は恐怖に震えていた。誰一人犯人が分からないでいた…たった1人を除いて…天才、新渡戸寅ノ助を除いては…

そして京大生等は新渡戸寅ノ助の頭の良さを再確認するのである…  
新渡戸寅ノ助講師、心理学講義の事である…

「え…カリバリズムを行う意味…であるからして…」

学生等是新渡戸の講義など全く聞いてはいない…まゝいつものことである

「食人とは…ひぐらしという小説で…」

ひそひそ話が聞こえる。京大生リンチ事件である。学生等は講義よりこちらに興味があるようだ。

「かのエドゲイン、アルバードフィシュの違いは…」

元々、新渡戸自身も講義等やる気はない、ただ仕事だからやっているだけだ。携帯を触る学生、談笑する学生、音楽を聞く学生…講師、学生共にやる気はない。

「心理の世界で…」

新渡戸の講義はいつもこんな感だった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「…」

新渡戸が急に黙りこんだ。体が凍りついたように動かない。訳がわからない…。今までの講義でこんな事は一度もない。学生等は何が起きたか分らず恐怖にも似た感情を抱く…

『寅様？』

ゆきも心配そうに新渡戸を見守っている。時間にして30分程だろう…

そしてこの沈黙の時間を打ち消すかのごとく新渡戸は叫びだした。

「私は京大生リンチ事件の犯人を知っているうううー！！！！」

さっきまでのざわつきが嘘のように教室はしずみかえたのだった…

さっきまでのざわつきが嘘のように教室はしずみかえたのだった  
…

### 第3話 大好き寅様！後編

「私は京大生リンチ事件の犯人を知っている！」

一瞬にして教室内は静まり返る…この新渡戸寅ノ助と言う男何を言  
い出すのか？今まで講義以外の話を聞いたことはない。それが突然…  
あまりのことに生徒達は口をあんぐり開け身を固まらせる…さらに  
新渡戸は話を続ける。

「君たちは犯人が誰だと思っかね？」

「……………」

誰も口を開ける者はいない。新渡戸は一度ぐるっと周りを見渡した。  
何であろう一番驚いたのは岩井ゆきと馬鹿田阿呆助である。そして  
新渡戸の目はある生徒に向けられる…

「君はどう思っかね…馬鹿田阿呆助君？」

「！」

馬鹿田の顔が見る見る青冷めていく。バレるわけなどない…そう思  
っていた。自分は事件の現場にはいなかった…だが新渡戸の顔をみ  
ると全てがお見通しのように見えた…馬鹿田は動揺を隠せないでい  
た。

「あ、あう！ぼ…僕は！ち、ちがう違う！う…あうううんこ！」

「ふっ…何を慌てているのかね？何も私は君が犯人だとは言っ  
てはいないのだよ？」



「う…う…うんこ！」

馬鹿田の顔は更に青冷めていく。ゆきは舌打ちをした。周りの生徒等もざわつき始めている。この時ゆきは確信していた新渡戸は事件の全てを知っている、全てはお見通しだと…だがそんな新渡戸も好きだった。京大生にも警察にも犯人像がつかめてはいない…やはり天才は違う…ゆきは新渡戸の話を聞き漏らさないよう必死だ。

「諸君！京大生リンチ事件の犯人はこの中にいる！！！」

新渡戸の罵声が教室内に木霊する…そして新渡戸は我が子に言い聞かせるようにゆっくりと語りだした。

「まず被害者の共通点が無いように言われているがひとつだけある……それは文学部出身と言うことだ…さらに心理学を選択している。普通に考えたあの偶然とは思えない」

「……………」

「次に犯人像だが……………恐らくは共犯者がいるだろう…君たちが犯人だと仮説するなら君たちは勉強だけが取り柄の下等生物だ…リンチなど行つ度胸もない…実行犯は第三者…君たちとは面識のないね……………」

「……………」

「犯人は恐らくは女だ…そして恐らくは私、新渡戸寅ノ助に何らかの憎悪…嫉妬を抱いているだろう…君たちは小、中、高全て学力はトップだった…自己顕示欲が人一倍強い…だが新渡戸寅ノ助に会っ

てしまった。この天才に比べれば君達は馬鹿だ！」

「……………」

「諸君！私の言いたいことが分かるかね？犯人は私に嫉妬しているのだよ！頭ではかなわないから私を困らせようとする！そしてことなくだらない事をするのは下等な女と言う生き物しかないのだ！犯人は私の事が憎いのか！それとも……」

「……………」

「私に好意を寄せているのかこのどっちかだ！！こんなくだらない事はやめたまえよ！こんな事をして私も私は君の事を好きにはならない！」

静まり返る教室内。新渡戸の吐息だけが気持ち悪くハアハアと響く……  
今まで新渡戸の講義等誰も聞いてはいなかった。生徒は寝たり、他事をしていた……だが今は違う……初めて生徒と新渡戸がひとつになった。理由はどうあれ新渡戸に皆聞き入っていた。  
そしてこの日以降、京大生リンチ事件は起こらなくなった。事件は犯人が捕まらないまま迷宮入りしたのだった……

今日も岩井ゆきは新渡戸の写真を見て目を覚める。新渡戸の意味の分からない講義に聞き入る。そして新渡戸の写真にキスをして眠りにつく……これからもずっとそうだろう叶わぬ恋心を抱きながら……

今日も馬鹿田阿呆助は岩井ゆきにストーカーをしている……叶わぬ恋だと知りつつ諦めない。まだゆきのウンコは食べさせてくれないよ

うだ…

今日も京大生は笑いながら通学する。もうリンチ事件は起きないだろう。だが忘れないでほしい。結果として事件を解決に導いたのは新渡戸寅ノ助だと言うことを…

これは余談だが岩井ゆきは新渡戸の将来妻となる人だ…だがそれは別のお話…である。

#### 第4話 新渡戸VSデート商法、前編

新渡戸寅ノ助は夜、書斎にこもりパソコンを眺めていた。今日は日課である『小説家になろう』を執筆してはいない…なぜか？それは新渡戸にとって思いもよらない事態が起こってしまったからだ。

話を10分前まで戻す

新渡戸は今日も小説執筆のためパソコンを開いた。すると一件のメールが届いていた。新渡戸のメールアドレスを人に教えた覚えはない。本来ならメール等来るはずはない…不審に思いながらもメールを開く。ここにメールの全文を記載しておく。

3 / 1 20 : 32

件：アナタのチンコ及び精子高額買取淫乱妻

<セレブ妻の精子買取オークションが秘密裏に行われていることを知っている人は、最近では多くなってきたと思います。

<

<貴方の周りにもいませんか？最近羽振りが良くなった人。

<そういう人は、だいたいセレブと言われる女性達にチンコ及び精子を高価で買い取ってもらっています。

<早い話、欲求不満な金持ち淫乱女とセックスをしてるんです。

<

<貴方のチンコを買い取り希望の女性が【1名】いらっしやいます。

<ここから写メ・条件をご確認後、無料承諾を行ってくださいませ。

-----

「私の精子を買いたい？当然だなあ…天才新渡戸寅ノ助の精子だからなあふふふ…高くつくぞ！その辺の精子とは違うぞ！だがアナタの選択は間違っではない！」

新渡戸は単純に嬉しかった。最近、女と縁がないこれほど良いことがあるだろうか？女と関係を結び更にお金も貰える…こんな良いことがあるだろうか？

なぜアドレスを知っているのかはどうでもいい。新渡戸の精子を高額で買い取りたいという女性がいる現実…

新渡戸は嬉しくて嬉しくてたまらない。とりあえずサイトに登録しこの新渡戸の精子を買いたいと言う女性を見ることがにした。

「ほう？なかなか気品のあふれた奥様だ…慶應大学出身？まずまずだなあ？なるほど旦那は医師で最近ハセックスレスかあ…なるほどねえ…明子さんね…」

単純に美人だ。この明子と言う女性は32才、芸能人でいう仲間由紀恵のようなキレイな女性である。かなり上玉だ。京大生にはない大人の魅力を感じる。

新渡戸は流行る気持ちを抑えつつキーボードを叩く。

カタカタ

『手が震える』

カタカタ

『私は緊張しているのか？』

カタカタ

『早く返事が来ますよ』に…送信…と』

新渡戸は椅子にの横の葉巻を手に取った。メールを送信してから数秒だったと思う。葉巻に火を付けようとした瞬間…

『！』

「き！来た来た来た来た来たー！熱っ！」

手に持っていた葉巻を落とす右手は黒く焼かれてしまったがそんなことはどうでもいい。正直こんなに早く返事メールが来るなど想像すらしていなかった。そこまでして新渡戸の精子が欲しいのか？震える手を抑えながらメールを開ける

3 / 1 8 : 4 5

件：明子です。

お返事ありがとうございます。恥ずかしいのですが私は自分でも淫乱だと自覚しております。1000万であなたの精子お譲りいただけませんか？—————

話が早い。新渡戸もそのつもりである。2、3通明子とメールのやりとりをする。話がトントン拍子に進んでいく、気がついたときには会う約束まで取り付けていた。

新渡戸は昔からどちらかと言うとモテる方だった。

だが彼は女性を見下し下等生物と思っている。体だけの関係なら構わないが恋人関係には一度としてなったことはない。下等生物など好きにならなかったし、なりたくなかった。だから今でも独身なの

だ。この明子と言う女性話から察するに体だけの関係を求めている  
こんな都合のいい女はいない新渡戸はそう思っていた。

そして1週間の時が流れ明子との約束の時がやってきた…

#### 第4話 新渡戸VSデート商法、中編

その女、黒のスーツに身を固め長く美しい黒髪を風になびかせている。年齢は三十路を廻ったところか？スタイルもよく端正な顔立ちである。大和撫子とも呼べる風貌ではあるがどこか眼光は鋭い。素人には見えないが水商売にも見えず…どちらかと言うと修羅場をくぐりぬいた極道のような…

いい女ではあるが声はかけずらい…

女は京都駅である男に目をつける。その男は若者が多い京都駅で明らかに浮いていた。男は白髪混じりの髪、口の上のヒゲ、グレーのスーツ。

年は中年をとくに過ぎているだろう。そう新渡戸寅ノ助である。女は新渡戸を哀れみの目で見つめている。

『可哀想に…今日のカモはアイツね…』

女は新渡戸にゆつくりと近寄る。新渡戸も気づく女を凝視する。

『年は50を過ぎたぐらいかしら？お金もってそうなおじ様ね…500万はいけるかしら？』

ゆつくり、ゆつくりと近づく新渡戸は女を舐めいるように凝視する。女は笑顔で近づく。

『さあビジネスの開始ね！』

女は新渡戸の目の前まできて満面の笑みを浮かべる。新渡戸はという口をへの字に結び鋭い眼光で女を見る



「はじめまして！明子です！新渡戸さんですか？」

「そうですか…」

「ワァー すっつごく会いたかったんですよ」

明子と名乗る女性、とても愛くるしい笑顔を見せてくれる。この笑顔でどんな男も骨抜きにしてきたのだろう。明子は恥じらいながらも新渡戸の手を繋ぎそつと体を寄せた。ところが…

「触るな！下等生物！」

『！』

明子の目が点になる。触るな？この新渡戸と言う男何を言っているのか明子には理解出来なかった。新渡戸のあまりの罵声に辺りの若者等は一斉にこちらを見ている。これは結構恥ずかしい。さらに新渡戸は明子に罵声を浴びせる。

「貴様のような下等生物が私のような天才を触るなど非常識だ！私は貴様に精子を売りにきただけなのだ！早くホテルにいくぞ！」

「ちょ、ちょ、ちょっと待ってよー！」

新渡戸は強引に明子の手を引く。明子も必死に抵抗するが男の力にはかなわずズルズルと動かされていく。周りのカップルも何が起きたか分からずただ見守ることしかできない。

「ねえ！ちょっといきなりホテルはないでしょ！ねえ聞いているの？」

新渡戸は全く聞く耳がないよう得手を引っ張る。この展開は非常に

まずい…

「ねえ！あの…ムードでもないの？あの…ちよつと！あつ！私  
おなか空いて死にそうなのよーどこか食事してからにしましょ！お  
願い…」

新渡戸の足が止まる。

「新渡戸さんもお腹すいたでしょ？腹ごしらえしてから楽しみまし  
よう？ね？いいでしょ？」

「……………わかった」

2人は駅から姿を消した。嵐のような出来事である。まだカップル  
達は何が起こったのか理解できずただただその場に立ち尽くす。

ある者は恐怖のあまり身を震わせる

ある者は恐怖のあまり金縛りにあつたように体が動かせず

ある者は恐怖のあまり奇声を発する

ある者は恐怖のあまり脱糞する…

明子はこの時はまだ分かっていなかった自分がターゲットにした男  
がどれほどの人物かを…

レストランにて…

オシャレなレストランである。頭上には煌びやかなシャンデリアが  
輝き、周りにはカップル達が楽しそうに食事を楽しんでいる。だが  
ひとつのテーブルだけ物々しい空気が流れている。そう新渡戸と明  
子のテーブルである…

「新渡戸さん何食べます？」

「別に…」

「えーと…お酒好きですか？」

「別に…」

「えー…シェフのオススメでいいですかねー？」

「別に…」

「……………」

「……………」

『てめーは沢尻エリカか？何様のつもりだクソオヤジ！』…っと明子は心の中で叫ぶ。

『平常心、平常心！あせつちやだめよ明子！私はデート商法界の力リスマ落としの明子よ…百戦錬磨の明子なのよ！どんな男も落とすて見せるわ』…っと心の中でさらに叫んだ。

2人のテーブルには美味しそうなクリームキノコのスパゲティが2つ並べられた。明子はフォークですくい口の中に放り込む。

「お！美味しい〜 明子ホッペタが落ちちゃう〜 ねえねえ！美味しいね新渡戸さん？」

「別に…」

『きー！ム力つくー！ブチ殺したいー！いやいや平常心、平常心

「! …… っ と心の中で叫ぶ。」

「ねえねえ新渡戸さん、スパゲティ好き？ 明子はだいたい好きだよお」

「別に…」

『ブチ殺す！ 絶対ブチ殺す！ コンクリート 詰めにしてブチ殺す！ この世の地獄を見せてやる！ いやいや平常心、平常心！ …… っ と心の中で叫ぶ。』

「新渡戸さん好きな食べ物ってある？」

「別に…」

「好きな歌手っている？」

「別に…」

「お仕事何してるの？」

「別に…」

「教えてよ」

「別に…」

「………」

「………」

「……………」

「明子別に発言禁止条約発令しちゃいます」

チツ！

「あ…あの…」

チツ！

「あう…」

チツ！

今度は舌打ちである。あの沢尻エリカでもしなかった舌打ちである。明子が言葉を発すると舌打ちである。これにはさすがの明子もたまらなかった…自然と会話は無くなる明子は涙と共に殺意が芽生えてくる。さらに畳み掛けるように新渡戸はこういった。

「グダグダくだらねーこと言ってんじゃねー！サッサと食べてホテルいくぞ！」

「……………」

明子は何もいわない。周りの客がこちらを見ているがそんな事はどうでもいい…この新渡戸と言う男只ではおかぬ…

ふたりは食事を終え店を後にした。目的地はひとつである。すると今まで黙っていた明子は新渡戸にこういった。

「新渡戸さん…私のオススメのホテルがあるんだけど…そこに行く  
ない？」

「…私はどこでも構わない…それより1000万は用意できている  
のだよな？」

「もっちらくん　じゃあそのホテルへlet's go！」

新渡戸と明子とはある建物にやって来た。ここはホテルなのか？看板はなく薄汚いビルである。新渡戸は疑問に覚えながらも欲望には勝てず。明子の後ろをついていく。エレベーターで5Fまでやって来た。明子はゆっくりと扉を開く。

そこは絵画が何枚も飾ってある殺風景な部屋だった。

#### 第4話 新渡戸VSデート商法、後編

新渡戸寅ノ助の目の前に移る光景…

薄暗い照明、殺風景なコンクリートむき出しの壁、室内の真ん中には業務用のプラスチックテーブルがありそして壁には数点の絵画が並べられている。絵画の下にはゼロが何個もかかれたプレートが垂れ下がる…

明らかにラブホテルなどではなかった。

明子は新渡戸を背に勝ち誇ったような表情をしている。彼女はこの世界では知らぬ者はいない。落としの明子とも呼ばれている。

彼女の手口はこうだ…まずインターネットでカモになる男を探し出す。そしてデートの約束を取り付ける。そしてデート後何食わぬ顔でホテルに誘う。だが連れてこられた場所はホテルなどではない。そして高額な絵画を売りつける…

そうこれはデート商法と言うものだ。

そしてこのビルまで来た男は絵画を買わずには帰れない…つまりビルまで来た時点で明子の術中は十中八九決まる…

新渡戸は不安そうな顔をする。だがもう遅い…全てを悟った時にはもう手遅れだ…

「どういうことだね？明子君？ここはホテルなどではないね？」

「……………」

「おい、聞いているのかね？何か言ったらどうだ？」

「……………」

「おい？何とか言いたまえよ！」

「…聞こえませんか？」

「は？何が？」

「この絵画達の叫び声……聞こえませんか？」

「はあ？」

明子と新渡戸は一枚の絵画の元にやってきた。プレートには  
ギル・ファンダー作

『絶望』

…と書いてある。ちなみにこの絵画五千万の値段で売られている。  
そして明子は我が子に言い聞かせるように新渡戸に語り出した。

「絵画と言うのはね…絵画に選ばれし者だけが手にすることができ  
るの…お金があるからって持つことは出来ないわ…この絵から聞こ  
えてくるの…あなたはこの絵を買う資格がある選ばれし者だ！」  
新渡戸はマジマジと絵を見る、腕を組み顔をしかめる。素人目から  
みると黒の絵の具で塗りつぶされたパレットのどこに魅力を感じる  
か理解出来ないが天才、新渡戸はどう見るのか？

「ギル・ファンダー作、絶望…か…」

「そう！この絵は1950年代に活躍した画家ギル・ファンダーの  
作品よ！こんなチャンスはもう無いわ！普通は億はくだらない画家  
よ！新渡戸さんこれは神が与えてくれたチャンスなのよ！」

明子は畳み掛けるように呟いた。だが新渡戸は思いもよらないこと



を口にした。

「贗作だな…これは…」

「は？」

「ギル・ファンダーと言う画家は人の真心にこそ悪があると悟った画家だ。確かに黒をベースに作品を作ることが多いがその中でも光を意識した原色を入れるはずだ。この絵には入っていないね？さらにこの絵には絶望と言う叫びが感じられない程度の低い贗作だな…」

「……………」

明子は何も言えなかった新渡戸の言ってることが正しい。凶星だった。さらに新渡戸は話し続ける

「そして決定的なのは絵の具だ…ギル・ファンダーが使っていたのは褐色型絵の具！この絵の具は時がたつにつれて絵の具本来が色褪せていくのだ炭素の性質でね…これは一般的な絵の具だね？」

「お、お詳しいんですね…」

明子は場の悪そうな顔をした。何故これほどまでに絵画が詳しいのかわからない…だが絵画の知識、眼力は想像以上のものだ…絵画では勝てないと悟った明子は奥からひとつのバイオリンを持ってきた…

「新渡戸さん奇跡ですよこれは！今日ここにこれたのは神に感謝しなければ行けません！今日たまたま偶然入荷したこのバイオリン…あなたが買っのを認めます！」

新渡戸はバイオリンを凝視する。古ぼけたバイオリンである。

「このバイオリン…ストラトバリウスです！名前くらい聞いたことがあるでしょ！あのストラトバリウスですよ！1億であなたにお譲りしますう！」

新渡戸はバイオリンを手を取った。

「ほつんと今日入荷ですよ！運命です！感じるでしょう中世のヨーロッパが！ぶっちゃけ私が買いたいくらいですよ…ほつんと幸運だよお！」

キューーン…

『！』

新渡戸はバイオリンを弾き始める…とても繊細な音色である。魂が研ぎ澄まされていくようだ…明子は聞き入ってしまった。敵ながらあっぱれである。

数分の静寂…殺風景なビル内にはバイオリンの美しい音色が木霊する…

明子は一瞬ビジネスの事など忘れてしまう…

「……………」

「……………」

「安っぽいバイオリンだなあ……」

演奏が終わり、新渡戸は呟く。明子のはつと我に返る。

「な、な、何を言ってるの？言ってるの？言ってるの？す、素晴らしい音色じゃない！さすがストラトバリウス！」

「……………は？」

新渡戸は鋭い眼光で明子を凝視する。ちなみに新渡戸はクラシックも博識でありバイオリンもプロ級だ。このバイオリンがストラトバリで無いことはとうにお見通しである

「これはストラトバリウスではない……ストラトバリウスは塗装に秘密がある。三百年の時間が流れ塗装が乾き最高の音を奏でるのだ。まずこのバイオリンは音が平面的すぎるストラトバリならもつと音は太く立体的なはずである……これは5、6万といった所だろう……」

「……………」

「この際、はつきりさせよう……ここに飾ってある絵画は全て贋作だろう？正直に言いたまえよ？」

「……………」

「……………」

明子は返す言葉がない。新渡戸がこれほどまでに絵画、音楽に精通しているなど思いもよらなかった……明子は悟った。この男には勝て

ない…つと。落としの明子と呼ばれ何人者男を地獄に落としてきた…だがこの新渡戸寅ノ助と言う男には勝てない…

「あなた…いつたい何者なの？」

「私かね？」

「私は芥川賞受賞作家、天才新渡戸寅ノ助である」

「！」

明子は目を見開く。聞いたことはある新渡戸寅ノ助…現代が生んだ天才…芥川賞受賞作家、新渡戸寅ノ助…現役の京都大学教授、新渡戸寅ノ助…

勝てぬ訳だ…

だが明子は清々しい気持ちでいっぱいである。笑われるかもしれないがこの天才新渡戸を落とす為に精一杯頑張った。思い残す事はない…

誰かが言っていた言葉、『敗北は心の解放』…今は心から実感できる。この男には勝てない。だがそれでいいのだ。明子はそつと新渡

戸に呟いた。

「私の負けよ」

…っと。2人はビルから出てネオンの奥へ消えていった。この後2人はどこへ消えていったかは誰も知らない…

そう誰も知らないのだった…

## 第5話 シーフードライス頑張れ！（前書き）

この物語は悩みました。でも実在のサイト『小説家になろう』とリンクさせている以上ありだと思っています。難しい事です。

## 第5話 シーフードライス頑張れ！

涙が止まらない…

キーボードの上は涙で濡れ指先は震える…書斎からは人の物とは思えないような…そとどちらかと言うと獣のうめき声のような得体の知れない音が響き渡る。

「ご主人様どうしたのかしら？」

割烹着をきたお手伝いさんである。お手伝いさんは心配そうに書斎の扉の奥から新渡戸を見守っている。すると…

「ライス先生！」

新渡戸の絶叫である…

「もうアナタの小説を読むことはできないのか！」新渡戸は両手でパソコンを掴み激しく左右に振る。口からは唾液が飛び散り、悲鳴にも似た奇声を発する。お手伝いさんもその様子を外から確認しており恐怖で今にも泣き出してしまいそうである…

更に新渡戸の両手は力がこもる。ケールは外れ今にも壊れてしまいそうだ。さらにディスプレイを激しく乱打している…狂ったか？いや…このパソコンに写る文を見てもらえれば納得してくれるだろう。パソコンには以下の文が書いてあった。

「……………」今までシーフードライスの小説読んでくれた方、感謝しております。突然ですがシーフードライスは小説家に

なろうつを半年間休載します。休載の理由としては長編小説を執筆しようと思ったからです。半年間かけて内容の深い小説を模索しようと思います…半年後、皆様に会える日を心より楽しみにしています。

作者：シーフードライスより愛を込めて…

—————

「……………」

「う…」

「う…」

「うわああああー！！嫌だ嫌だあ！半年間もライス先生の小説読めないなんて嫌だあ！」

「うわああああー！！」

新渡戸は白目をむき、腹をかきむしり絶叫する。自ら爪をはがし肛門に押し込む！

部屋の扉からコソツと覗いていたお手伝いさんもその光景にショツクを受ける…

新渡戸寅ノ助は現、京都大学教授であり芥川賞受賞作家なのだ。そんな人のお手伝いさんをしている…仕事に誇りを持っていたし、新渡戸を尊敬していた…

その新渡戸が今は餓鬼のように醜態をさらしている…お手伝いさんはその場で泣き崩れた…



ここまでの状況が理解できない読者様にシーフードライス（以下ライス先生）とは何者か？を説明しよう。

新渡戸とライス先生との出会いは今から1年前までさかのぼる。

1年前：

あれはととても暑い夏の日のだった：

その日の新渡戸は夜、日課である『小説家になろう』の評価依頼を受けていた。

（当時の新渡戸はサイトに登録したものの携帯小説を書く気など無かった素人の作品を見て気晴らしになればいい：ぐらいにしか思っていない）

自ら評価してほしい：と言う自惚れ君に現実を見せてやる。新渡戸の評価は厳しい。そこへある評価依頼が来た：そうこれがライス先生との出会いである。

————— 私は塾の講師をしています。しかし私の夢は小説家になることです。私の書いた小説の評価をしてもらえないでしょうか？

シーフードライス

—————

よくあることだ。現実逃避した小説家になりたいと夢見る男性。自分の実力も知らずマスターベーションのような小説を書く：こいつう男に限ってクソつまらない物語を書く：

小説家を夢見る人などどれだけいるか？文字だけで自分を表現することなど凡人にはできない：

舌打ちをしながらもこの新渡戸はこのシーフードライスと言う男の評価依頼を受ける事にした。

「小説家志望の男…どーせパクリのような小説を書いているんだろ  
う」

新渡戸はブツブツ独り言をいいながらライス先生の小説を開く。

ところが…

青天の霹靂とはこのことを言うのだらう…

以下ライス先生の小説である…

題名：ボイン隊

俺たちボイン隊！ボインボイン大好きボー……ン！

四六時中ボイン！戯れるボイン大好きボイン大好きボイン

大好きボイン大好きボイン大好きボイン！

酒を飲めばボイン大好きボイン……

以下省略

何度も何度も新渡戸はライス先生の小説を読み返した。そう何度もだ…

そして悟った。自分は井の中の蛙だと…

これほど衝撃を受けたのは初めてかもしれない。この小説かどうかわからない『ボイン隊』に新渡戸はライス先生の人間性を見た…

「こ…この男はとてつもない才能がある！悔しいが私にはこんな小説は書けない…天才だ！」

震える指で更にライス先生の他の小説も開く…

『！』

言葉にならない…

画面全体に写る文字…それはう・ん・こ…さらにち・ん・こ…ま・ん…

そう下ネタである。わざわざライス先生は携帯小説サイトに登録してまで下ネタを書いていたのである…

「考えられない…これは小説を超えている！起承転結とかそんなちんけな問題じゃない！」

新渡戸は嬉しかった。新渡戸は小さい頃から神童としてもてはやされていた。自分の事を天才だと思い込み、自分以外の人間は下等生物だと思っていた…だがこのライス先生は違う！間違いなく自分と同等…いやそれ以上の天才である！新渡戸はそう思った。

翌日からだ。新渡戸が携帯小説を書き始めたのは新渡戸はライス先生のような小説を書きたかったライス先生のようになりたかった。

だから下ネタを多用した。だから作者名を『主食ポコチン先生』にしたのだ。

「私もライス先生になりたい！新渡戸寅ノ助は主食ポコチンとしてライス先生を超える！」

ライス先生の小説、ウンコシリーズ、射殺シリーズ、連載…全てを読みあさった。

ライス先生は新渡戸の人生の師である。顔も知らないが師であるのだ…そのライス先生が携帯小説を休載する…こんなショックな事他にあるだろうか？  
最後に新渡戸はライス先生にメッセージを送った。メッセージは以下の文である…

—————

親愛なるライス先生様へ…

半年間の休載…正直心が痛いです…私はあなたの小説を楽しみにしておりました…寝るときも排便するときも片時もあなた様を忘れたことはございません。

でも…あなた様自身が決めたことですものね…

私はひとつ気づいた事があります。

私はあなたになりたかった…でも違うんですね。私はあなたじゃない私は『主食ポコチン』なんです！私も自分の道を突き進みます。半年後あなた様に会える日を楽しみにしています主食ポコチン。

――――

人は出会いがあれば別れもある…

確かに別れは寂しいことだ。だが出会い、別れを繰り返すことによつて人は大きく強くなる…

今は辛いかもしれない…

だが時代は回るのだ…

あの頃は良かったと思う日がきつと来る！

そうきつと来る！

シーフードライス先生頑張ってください！応援しています！メタカツ、新渡戸寅ノ助、新渡戸家のお手伝いさんより愛を込めて！

第6話 ファミマのなかまさんが好きで好きでたまらない！前編（前書き）

今回、新渡戸の登場は少ないです。

## 第6話 ファミマのなかまさんが好きで好きでたまらない！前編

「二百円のおつりになります」

「あ、どうも…」

おつりを渡す際、女の指が男の手に触れる。男は極度の緊張と高揚感で失神してしまいそうだ。

この男こそ、この話の主人公、京都大学一年、陸奥モコ道<sup>むつりもこみち</sup>である。

陸奥は『むつ』とは呼ばず『むつり』と呼ぶ。

モコ道は今恋をしている…相手は毎日会う女性。いつもネクタイの上に緑のラインが入ったジャケットを着ている。そうファミマで働く女性である。名札には『なかま』と書いてある。

「あ、あう！すいません…肉まんひとついいですか！」

「はい、かしこまりました」

なかまさんは手際良く肉まんを袋に詰める。横顔も素敵だ。モコ道は生まれてこの方女を知らない童貞である。中学生、高校普通の学生が遊んでいる時でも勉強した。その引き換えに京大に入れたのだ…

女の接し方を知らないのだ…話し方が分からないのだ…『好きです』の四文字が言えない…妄想の中ではなかまさんとホテルにいるのだ…そんなことは現実には起こらない。モコ道は肉まんを待つ間、妄想に明け暮れる…妄想の中で行為のフェニッシュを迎えるころだ

「あの～お客様？」

「は？はい！」

「肉まん出来ておられますよ？」

『！』

モコ道の妄想が終わる。モコ道の前にはレジ袋が置かれている。袋の先は持ちやすいように丸めてある。勿論冷たいものと温かいものは分けてある。嬉しかった！モコ道は嬉しかった！自分だけに持ちやすいように袋を丸めくれる！そう自分だけに！

「わ、わ、わざわざ袋丸めてくれたんですか？ぼ、僕のために？うれしいですう！」

「いえ、袋丸めるのが決まりですので」

『！』

なかまさんはキツパリと言った。勇気を出していったのだ！自分だけに袋を丸めてくれていると信じていた！他の男にも丸めているのか？モコ道のシヨックは計り知れないものである。自然と涙が流れる。モコ道にとっては人生最大級のシヨックだった。モコ道は逃げるようにその場をさった。だが気づいていなかったこの時モコ道は…

肉まん代を払っていなかったことに…

喫茶HMLにて…



店内の薄暗い証明は不気味にギターを照らす。壁には無数のドクロが笑って見える。そうここはかの有名なヘビメタ喫茶である。

「お客様、鉄の処女ハンバーグでございます……キョメラカアア  
—————！」

モコ道の前に置かれた人型ハンバーグは無残にも粉々に破壊された。

「ではごゆつくり……」

店長である高島あや子は奥に消えていった。

モコ道は学校帰り仲間達とよくこの喫茶を利用する。モコ道の仲間……『モテない同盟』とでも言っておこうか？モテない同盟にはモコ道を含め三人いる。

ダサ男とメタカツとそしてモコ道だ。三人とも実際は童貞なのだがプライドの高いモコ道はいつもホラを吹きまくっている。今日もそうだ……

「モコ道さん……やっぱり白塗りのアヤパンも可愛いっすね！」

「ふっ！俺に言わせるとまああってとこだな！でもエッチのフェニッシュの顔は最高だぜ！」

「ま、まじっすか！アヤパンまで喰っちゃたんですか？」

ダサ男とメタカツは驚きの表情をする。勿論ホラである。だがモコ道のホラはこんなものではない

「穴ウンサーといっても所詮女ってことだな！俺のテクニックにか

かればヒイヒイ言つてたぜ！」

「まじっすか！」

ダサ男とメタカツは更に驚きの声を上げた。そしてメタカツは感心したように言つた。

「モコ道さん、さすがっすネ！さすが十五で千人斬り達成しただけのことはありますねえ〜！」

モコ道は十歳で童貞を失つた。相手は小学校の美人教師である。それから女とやりまくり、十五には千人斬りを達成した。下は五歳、上は五十歳…学生から政治家までを喰つた…と言うホラを吹いていたのだつた。

ダサ男とメタカツは同い年のモコ道に敬語を使う…なぜか？それはただ女を紹介してほしいからだそしてメタカツは言いにくそうに言つた。

「あの…モコ道さん？前に話した沢尻エリカを紹介してくれるって話どうなりましたか？」

「エリカは自宅謹慎中は紹介できない！」

いつも適当に嘘をつく。沢尻エリカなど知り合いではないのに…

「でもモコ道さんは沢尻エリカとやりまくっているんですよね？」

「まあな」

…ある意味、脱帽である何故これほどまでに平気で嘘をつくのか？

それは誰にも分からない…

実際のもこ道はろくに女と話も出来ない童貞君である。そして今はコンビニのなかまさんに恋をしている…

三人はヘビメタの爆音を聞きながらホラに聞き入っていたのであった…

## 第6話 ファミマのなかまさんが好きで好きでたまらない！中編

「人の遺伝と感情の関係とは…であるからに…」

講義室には新渡戸の感情の何もこもってない講義が始まっている。正直クツソつまらん！案の定学生等は私語をしたり、眠ったりしている。陸奥モコ道も例外ではない。モコ道は講義など上の空でなかまさんの事ばかり考えている…

『あの子はひょっとして俺のことが好きなんじゃないのか？』

何の根拠でそんな事を思うのか？

『間違いない…好きに違いない…だっていつも袋持ちやすいように丸めてくれるし…俺に好意がある証拠だ！』

…学習能力のない男である。それは決まりで全ての客にやってることだと言つてなかったっけ？ポジティブもほどほどに。

『更にいつもお釣りを渡すとき俺の手に触れてくる！あれ絶対意識してるよ！間違いない！』

いや、間違った解釈です。たまたま手が触れただけです。ポジティブもほどほどに…

『あの潤んだ瞳…いつも俺のを見てくる…彼女にしてほしいな』  
…って気持ちが伝わってくる』

どうしようもない男である。そしてモコ道は妄想に入り自分の世界に閉じこもった。だが邪魔する者が一人…モテない同盟メタカツで

ある。

「あの〜モコ道さん？」

「……………」

「あの〜すみません…ちょっといいですか？」

「……………」

「あの…沢尻エリカはいつ紹介してくれるんでしょうか？」

「うつせーなー！今、妄想のいいとこなんだよ！ちょっとは気をつかえ！沢尻エリカ？まだ謹慎中だあ！」

講義室にはモコ道の怒鳴り声が激しく響いた。学生等は一斉にモコ道を冷ややかな目で見たことは言うまでもない。だが講師である新渡戸は気にもせず講義を続ける。そしてモコ道も気にもせず妄想を続ける。

講義室内は静寂を取り戻す。メタカツはぶつぶつ独り言をいい下を向いている。もう誰もモコ道の妄想を邪魔する者はいない…そう思われたのだが

講義も中盤にさしかかった頃。新渡戸の発言によりモコ道は我を失うのだった…それは新渡戸のこの発言からである。

「人の恋愛感情など遺伝子レベルで考えれば種の保存以外ない！」

新渡戸が淡々とした口調で言う。誰も聞いてはいなかった。ある一人の学生を除いては…モコ道である。さらに新渡戸は講義を続ける。

「人を好きになる…それは子孫を残したいと言う本能以外なものでもない！」

モコ道はブルブルと震え、血管が浮き出てる。

「幸せにしたいとか抜かす輩は本心ではない！セックスして子供を作りたいだけだ！人間なんてそんなものだ、純愛など存在しない！」

「……………」

「そもそも人はより優秀な遺伝子を残そうとするルックス、学力、体力、それしかないのだ！君たちは性欲の固まりの下等生物だ！」

「……………」

「でも恥ずかしいことではない！それが人間なのだ！」

「……………」

「愛など存在しない！」

「違う！…！」

怒鳴り声が室内に木霊する。陸奥モコ道である。モコ道は立ち上がり拳を握り締める。顔は真っ赤に染まり今にも血管が切れそうである。学生等は何が起きたかも分からずソワソワと落ち着きがない…

「俺の…俺のなかまさんに対する感情は純愛だ！セックスだけが目的でどういうことだ！」

新渡戸は呆れて物が言えなかった。別にそんな事を言っただけでもない。だがモコ道にとっては自分を否定されたも同然だった。

「違う！俺は…違う！本気で好きになったのに！俺は…俺は…俺はあああウワアアアア……！」

モコ道は奇声と共に逃げ出すように教室から出た。学生は皆、状況が理解できずポカーンとしている。そして新渡戸にいたっては何事もなかったかのように講義を続ける。メタカツは…気にもしていないようだ、彼にとっては沢尻エリカ以外興味が無いのである…

モコ道は走った！初めて女の人を好きになった…それは決して下心ではない純愛なのだ！そう思っていた…  
自分は本気でなかまさんの事が好きなのだ…自分の愛は本物だ！そう思っている…

「ハアハア…」

モコ道は見上げる。そこには緑と白の看板、ガラス張り…そうなかまさんが働くコンビニまで来ていたのだ。特に理由はない…買いたいものもない。ただなかまさんの顔が見たかった。ただそれだけである。そしてモコ道は自動ドアの奥へと進むのである…

## 第6話 ファミマのなかまさんが好きで好きでたまらない！後編

その瞬間コンビ二内は異様な空気に包まれた…

なかまさんの目に映る光景…Ｔシャツ、Ｇパンを着た男…髪はボサボサであり体は火照っているのか全身真っ赤に染まっている。さらに目の焦点は定まっていらない…そう陸奥モコ道である。

モコ道はフラフラとなかまさんの元へ歩む…まるでジャンキーのようだ。

「僕は…僕は愛してるよ…これは純愛だよね？」

モコ道はぶつぶつ独り言をいいながら近づく、なかまさんは恐怖に震えモコ道をえたいの知れない物を見るような目で見る…

「嫌あ…こないで…」

なかまさんは小声で言った。だがモコ道の耳にはまったく入っていない。コンビ二内には客もおらず店員のなかまさんしかない。助けを呼ぶことも出来ない…

「新渡戸の野郎許さねえ…俺となかまさんの愛を否定する奴は許さねえ…芥川賞が何なんだよ…」

モコ道は既に我を失っている。こつという男は本当に何をするかわからない

「嫌！こないでよ！」



なかまさんも必死に叫ぶ…だが今のモコ道には馬の耳に念仏である。よくエリート程挫折にもろいと言う…モコ道は絵に描いたようなエリート路線を走ってきた。テストでいい点を取れば誉められ期待された。今まで自分を否定する奴はいなかった…

自分は初めて本気で人を好きになったのである…それを種の保存が目的と言われれば冷静でいられるだろうか？モコ道は冷静でいられなかったのだ…

そして気がついたときにはモコ道はなかまさんの肩を掴んでいた…

「愛してるよ…」

モコ道は耳元でそつと呟き抱き締めようとしたときだった。

「グスン…グスン…」

泣いていた…

なかまさんは恐怖の余り涙を流していた。涙を見たモコ道の動きは止まる…

ふたりの時は止まる。まるで凍り付いたかのように動けないふたり…そしてモコ道は自分が何をしたのか理解した…

「あっ！」

さつと肩を離すモコ道。だが時既に遅し…

なかまさんはまだ涙を流しレジ下にくすぐまっていた。

「グスン…グスン…」

涙を流し体を震えるなかまさん…気のきいた男なら優しい言葉ひと

つ掛けるのだろうか。いかんせんモコ道である。ろくに女性と会話もしたことがない男…掛ける言葉も見つからない。自業自得？実際その通り！

モコ道はただ涙を流すなかまさんを見下ろす事しかできない…

「グスン…グスン…」

「あ、あう…」

モコ道の顔は青覚めている…このあとモコ道はどおしたと思う？逃げたんだ…涙を流すなかまさんを置いてこの男は。最低かもしれない…でもモコ道にはどうしたらいいか分からなかったのだ…

5時間後…

既に日は落ち、辺りは静寂の闇が漂う。闇の中でただ一つ光となる物、そうコンビニの光だけが街頭のように辺りを照らすコンビニ内には光に誘われてか安息を求めてかは分からないが数人の客がレジに並ぶ。客の中に見慣れた女性がひとり…なかまさんである。彼女は仕事を終え、私服に着替えていた。

「お疲れ様～」

「なかまさんお疲れ様～気を付けて帰ってね～」

男性店員が笑顔で見送る。なかまさんは手を振る…そのありふれた光景を外から凝視している男がいる。モコ道である。モコ道は眉間にシワを寄せ下唇は血がにじむ…

この男、5時間ものあいだ何してたと思う？

待ち伏せしてたのだ、なかまさんを…ストーカーと思う読者もいるかもしれない…でもモコ道にそんなつもりはない、ただ謝りたかったのだ。昼泣かせてしまったことを…ただ一言『ごめんと…』  
謝りたかった…

自動ドアがガーッと開く。なかまさんが出てくるモコ道はサツと草村に身を潜め辺りを見る。謝るタイミングを見計らっているのだ…するとなかまさんは東に歩を進める、モコ道も東に歩を進める。西に向かえばモコ道も西に向かう…

十分程、後をつけた頃なかまさんは異変にきずく

『後ろに誰がいる…』

なかまさんは恐怖で歩く速度が速まる…嫌な風がふく…

『嫌…こないで…』

なかまさん今にも泣き出してしまいそうだ。夜道後を付けられる恐怖といったら…女性の方は分かるんじゃないでしょうか…

『嫌…嫌あ…』

なかまさんは早歩きになるが、後ろからの男（モコ道）をふりほどけない…

『……………』

後ろの男が近ずいてくる…なかまさんは更に歩く速度を速めるがど



モコ道はなかさんに近づく。

「嫌！こないでよー！お願いだからこないでよー！誰か！」

なかまさんはパニック状態に陥っている。この場から逃げ出したい…この訳の分からない男になにされるか分からなかった…

「助けてえ！キャアーーーーー！」

更に大きな悲鳴を上げた時だった。モコ道は後ろに強く引かれる力を覚えた。モコ道は地面に尻餅をつく…見上げると警察官がひとりモコ道の胸ぐらを掴んでいた。

「何やっとするかー！」

警察官の罵声がモコ道に降り注ぐ。

「お嬢さん、もう大丈夫！このエテ公がー！」

警察官はモコ道を激しくぶん殴り蹴り飛ばした。モコ道は地面に叩きつけられる。歯は欠け血反吐が飛ぶ。さらに警察官は肩を掴み背中までもっていく…激痛を覚えた。そして手首に冷たい感覚を覚える…

手錠である。モコ道は手錠を掛けられてしまったのだ。

「婦女暴行未遂で逮捕する！」

「！」

なかまさんはまだ恐怖で震え涙を流しているのであった…辺りには

冷たい風が流れていた…

## 第7話 勿忘草（前書き）

6話の続きです。

## 第7話 勿忘草

「貴様あ！いい年こいてストーカーなんかしてんじゃねー！」

「違うんですお巡りさん！僕はただ謝りたかっただけです！誤解な  
んですよー！」

「じゃあ何故彼女は悲鳴を上げて泣いてたんだ！説明しろ！」

「う…それは僕が知りたいことですよー！」

パンツ！

警官が激しく机を叩く。あの後モコ道は有無を言わずパトカーに乗せられ京都府警に連れてかれた…三畳半の狭い部屋内、コンクリートむき出しの壁はかなり圧迫感がある。そして真ん中に机越しにたたずむ警官とモコ道…そこは取調室である。

警官はモコ道にライトを向けた。強烈な光で目が歪む。

「貴様は日頃から彼女に好意を寄せていた。毎日彼女をつけまわした…そして欲望が抑えられず今日彼女を乱暴しようとした…どっちにしる貴様のやってた事はストーカーに他ならない」

モコ道は今にも泣き出してしまいそうだ。だが信じていた…ちゃんと真実を話せばこの警官も分かってくれると…

「お巡りさんいいですか！僕はただ謝りたかっただけなんですよ！昼間彼女を体を触ったら泣いてしまった事…それを一言ごめんと言いたかった…だから夜道後を付けたんです！これのどこがストーカー



「何ですか？」

「それをストーカーって言っただよ！」

バンッ！

警官は更に机を叩く。

「貴様はどこにしるストーカー禁止条例に引つかかる！貴様は彼女の気持ちを考えたことがあるのか！」

「ふっ…僕達は愛し合っている！」

「貴様あ！」

警官は胸ぐらを掴む。モコ道は息苦しさで顔が歪む。その時

トントン

取調室のドアがノックされ一人の若い警官が入ってきた。何やら警官どおし話し合っているようだ数分後、警官がモコ道の元へ戻ってきた。

「貴様…彼女に感謝するんだな彼女被害届は出さないってよ」

モコ道にとっては当然のことである。僕達は愛し合っているのだ。彼女も分かってくれたのだろうモコ道は警官を睨みつけ立ち上がる。

「じゃあ僕はもう帰っていいんですね？ほんと近頃の警察はムカつきますよ…勝手にストーカーって勘違いしやがって」

モコ道はひとりブツブツ文句を言い警察の批判を繰り返す。ところがこの警官意外なことを言い出す。

「ちよつと待ちなさい彼女からひとつ条件があるそうだ」

警官はそう言う一枚の紙とペンを持ち何やら書いている。そこにかかれた文にモコ道は目を疑った。そこには…

1月20日

私、陸奥モコ道は仲間美穂様の半径10m以内に近寄らないことを誓います。

つと書いてあった。

「これが彼女からの条件だ…ここにサインしなさい…もう近寄っちゃだめだよ」

「……………」

「どうした？早くサインしなさい」

「…嫌です」

「いいからサインしなさい」

「嫌です!」

「……………」

警官は一度ため息をつきモコ道に優しく話し出した。

「君は愛し合っている…」と言った…でもこれが彼女の気持ちなんだよ…彼女は君のことが怖いと言っていたそうだよ…私は君の好意は否定しないでもこれは愛なんかじゃないよ…君が本当に彼女の事が好きなら彼女の気持ちを汲むべきだよ…」

「……………」

「君はまだ若い…これから色々な恋愛をすると思う…いつか分かるときがくると思う…本当の愛…愛とはね相手の全てを受け入れるものだ…今の君の愛は攻撃的すぎるよ…わかるね？」

自然と涙が出てくる。確かにこの警官の言うとおりかもしれない…今までのなかまさんとの思い出が走馬灯のようによみがえる…

いつも持ちやすいようにレジ袋を丸めてくれた事…嬉しかった…

いつもお釣りを渡すとき手触れたこと…嬉しかった…

いつも笑顔でいてくれるあの笑顔でどれほど癒されたことか…これほどひとを好きになったことはない…

もう会わないでほしい…彼女が望なら…モコ道はそう思った…そしてペンをとったのだ。一字一字心を込めて書くが涙で字が滲む。その光景を警官は黙ってみている…

「……………」

「……………」

そっとペンを置く

「頑張ったね…」

警官が言った。モコ道は立ち上がり部屋を後にする。帰り際、警官はモコ道の肩を叩き最後に一言言う。

「いつか…いつかきつとこの悲しい思い出も良かったと思える日が来るからね！」

モコ道は何もいわず。頭を下げ暗闇に消えていった。もうなかまさんと会うことは出来ない。会ってはいけない…それが陸奥モコ道のなかまさんに対する最後の愛情表現だと思っていた。

心の恋人…なかまさん…幸せになってほしい…それがモコ道の望むことだ…こうしてモコ道の悲しい初恋が終わりを告げる

帰り際、道のスミで小さな白い可憐な花を見つけた。その花はアスファルトから突き出し今にも枯れてしまいそうだ。こんな目立たない場所誰にもかかわらず気づかないだろう…

小さく儚い可憐な花……それは勿忘草である…

勿忘草の花言葉は…

『真実の愛』

## 第8話 新渡戸の過去…1章（前書き）

今回、この物語はひとつの作品として書きます。

## 第8話 新渡戸の過去…1章

「ありがとうございます」

店員が愛想よく頭を下げる。新渡戸はぶっきらぼうに缶コーヒーをとり。店をでる。

とても寒い日だった。凍てつくような寒さの中若いカップル達は身を寄せあい新渡戸の横を通り過ぎる。

新渡戸は缶コーヒーを開け壁にもたれ掛かり辺りを見渡す。

「……………」

参考書を片手に歩く学生。もう受験シーズンか…この学生は無事志望校を合格できるのか…新渡戸は知るよしもない。

「……………」

仲の良さそうな親子。これから子供はどういう人生を送るのか…新渡戸は知るよしもない。

「……………」

ゴミをあさるホームレスこの人はどういう人生を送ったのか…新渡戸は知るよしもない。

全ての人は新渡戸寅ノ助など存在しないかのように過ぎ去っていく。自分は空気と一緒になのか…所詮そんな物だ新渡戸がどうなるうとこの人達にはまったく関係ない事なのだ。新渡戸が死んでもこの人達の人生はなんら変わらないだろう…そんな事を考えていた。

そして新渡戸が缶コーヒーを飲み終えた頃後ろから耳をつんざく重低音が聞こえてきた。

ガオオオオー！

この耳ざわりな音…聞き覚えがある…

ガオオオオー！

新渡戸に近ずいてくる。この排気音は…180SX？

「懐かしいな…」

新渡戸は呟いた。後からは白い180SXが新渡戸を通り過ぎようとしていた。

リトラクタブルライト、ハッチバッグ、シャープなスタイル。砲弾型のマフラー。マフラーは社外だろう。やはり180SXは白に限る…

新渡戸は白い180SXをまじまじと見る。そして新渡戸を通り過ぎようとしたときだ。

キィ！

新渡戸の前に止まった。新渡戸の知り合いで白い180SXに乗っている人などいない…

新渡戸は少し不安になるウインドがゆっくりと下がっていく。

「お久しぶりですね先生」

「……………」

180SXに乗っているこの男。年は三十を過ぎたところか？だが新渡戸はこの男を知らない。新渡戸はまじまじと男の顔を見るがやはり知らなかった。

「失礼ですが…どちら様です？」

「先生！まあ無理もないですか…十年ぶりですものね…水野です！水野春樹です！」

「え？ああ水野君か！」

思い出した。この水野春樹という男性…新渡戸の教え子である。

「久しぶりだね…でも驚いたな君が180SXに乗ってるなんて…」

「そうですね…先生も昔180SXに乗ってましたものね…」

新渡戸は車の後ろに回った。

丸いブレーキランプがふたつ、そしてリアウイング…

「タイプXか…本当懐かしい…」

水野が乗っていた180SXは新渡戸が昔乗っていた180SXと同じスペックであった。

「そうですタイプXです…こうして会ったのも何かの縁ですね…どうです先生少しドライブでも？」

「……………」



新渡戸に断る理由はない。家に戻ってもお手伝いさんが待つだけである…それに昔のついていた180SXに乗ってみたいと思った。新渡戸は水野の誘いを受けた。

シートベルトを閉める。この180SXと言う車攻撃的な外見とは裏腹に内装は非常に地味である落ち着いたグレーに統一されている。そして乗ると意外と車高の低さは気にならない

水野はアクセルを踏む。

「不思議な感じだよ…私が乗っていた180SXと全く同じ感覚だ…あの頃を思い出すよ…」

水野は黙ってきいているダッシュボードの上にはBLITZの水溫、油溫、油圧計…エアバッグは取りステアリングも社外品だ…まるであの頃の…あの頃の新渡戸の180SXと同じである。

このターボ音…三千回転を超えたあたりから聞こえるターボ音…懐かしい窓の外にはお店の光や街頭がネオンのように光る…

「本当に不思議だな…いつも見る光景と車の中から見える光景は別物に見える」

水野はギアを変える。もともと新渡戸はベラベラ人に話すタイプではないだが今日の新渡戸はどこかおかしい…

「まるで十年前に戻った気分だよ…あの頃にね…水野君、君は過去に戻れるとしたらいつに戻りたいかね？」

「…先生はまだあの事を引きずってるのですか？」

「……………」

「そうかもな……」

新渡戸が寂しそうに言った。それからふたりは黙り沈黙が続く。車の排気音だけが車内に響き渡る。どのくらいの時間が過ぎただろうか？ 辺りは人通りが少なくなり街頭もポツポツとしか無くなってきた。この水野と言う男どこに向かっているのか？ 新渡戸も少し不安になっていき水野に尋ねた

「水野君いったい何処へ向かっているのかね？」

「先生見せたい物があるんです」

「……………」

ふたりはまた黙りこむ。辺りは山に入り建物も少なくなっていく……車のライトだけが光となり辺りは薄暗くよくわからない二十分ほど車を走らせ車が止まった。水野はキーを抜きシートベルトを外す。

「ここは何処かね？」

新渡戸が尋ねる。水野は笑顔で答えた。

「車から出て自分の目で確認してください」

新渡戸はシートベルトを外しドアを開けた。そこにあるものは古ぼけた木造の建物である。新渡戸はその建物に見覚えがある。自分が十年前に住んでいた所だった。新渡戸は後ろを振り返る……  
ところが……

いない……

いるはずの水野の姿が見当たらない。車の周り、車内、全てを探しても見当たらない……

消えた……

そんな馬鹿な事はない……  
だがどれだけ探しても水野の姿は見当たらなかった。新渡戸は車の中に入りおもむろにダッシュボードを開ける。そこに入っていた物は目を疑う物だった……

車検証である。新渡戸寅ノ助名義の……水野が乗ってきた180SXから何故自分の車検証が……  
新渡戸はこのときずいた外の様子がおかしいことに……

「……………」

薄汚れた木造の建物から光が出ている。四階建ての建物から光がポツポツと…

新渡戸は不思議と穏やかな気持ちになり吸い寄せられるように建物へと向かう。

汚れた階段を上がる。懐かしい…自分が昔住んでいた場所…ある人と住んでいた場所…

ゆつくりと階段を上がる…

一階に一人、二階に二人が生活しているのが伺える。

四階…

自分が昔住んでいた所だ…新渡戸の体の中から何かこみ上げてくる物がある…

表札…『新渡戸』とかかかれている。中からは美味しそうな匂い…

新渡戸は引き寄せられるようにドアを開けたのだった。

部屋からエプロン姿の女性が見える。女性は新渡戸にきずいた…

「お帰りなさい」

女性は笑顔で新渡戸に言ったのだった…

## 第8話 新渡戸の過去…1章（後書き）

人は必ず人生における失敗があります。過去には戻れないのだから悔やんでもしょうがない…でも悔やみきれない失敗もあるのです。もしタイムマシンがあればあなたはどの時代に戻りたいですか？

今回、趣向を変えて投稿させていただきます

## 第8話 新渡戸の過去…2章

「先生お帰りなさい」

新渡戸の前に立つ女性…髪を束ね、花柄のエプロン姿を見せる。なれない料理のせいだろうか、指には絆創膏が張られている…  
この女性…新渡戸が十年前に一緒に住んでいた女性だった…  
名前は尼崎杏奈という。

新渡戸は自分の目の前に映る光景が信じられなかった。何故なら尼崎杏奈はもうこの世にはいないはずだからだ。死んだはずの尼崎杏奈が自分の目の前にいる…もしや死んでいなかったのか？いやいや間違いない彼女は死んだはずだ…

そう死んだはずなのだ…だが現実には尼崎杏奈が目の前にいる

「……………」

「……………」

「……………」

新渡戸は我が持つ天才的頭脳をフル回転させる…今この有り得ない現状を理解しよいと必死だ。京大教授、美術、音楽に天才的才能がある。さらに芥川賞受賞作家ときた新渡戸である。自分なら理解できるはず…と思っている。

「……………」

「……………」

「……先生？どした？」

杏奈が怪訝そうな顔で新渡戸を見る。新渡戸は何も答えず眉間にシワを寄せる。

「先生、何かあった？」

「……………」

昔、バック・トゥー・ザ・フューチャーと言う映画があった。少年達が車に乗り込みタイムスリップすると言う内容だった。自分にも同じ事が起こったのか？180SXに乗り時空を乗り越えた。

「……………」

「……………」

あり得ることも知らない。条件を満たせばタイムスリップも考えられる。

まずタイムスリップの条件として光速度を超えることだ。光速度は約30万km/s…

一般的に一秒間に地球7周半…これを180SXが超えることが絶

対条件である。

180SXとはスポーツカーである。チューニングによって馬力も上がる。タービンから何から何までレース使用に変えれば光の速さを超えることも可能か？

「……………」

「……………」

「…あの…先生話聞してる？ピラフ作ったんだけど…」

でも仮に光速度を超えたとしてだ。人はGに耐えうる事が出来るのか？戦闘機でさえかなりのGがかかる…光速度など戦闘機の比ではない…通常なら内蔵が潰れ原型を留めないのではないか？

「……………」

「……………」

「…先生！人の話き・い・て・る！」

いや…まてよ…そもそも光速度の元になった『相対性理論』が間違ってるって仮説したら…

そもそも光速度とは1873年マイケルソンによって導き出された数値がもつとも適するって言われている。マイケルソンも相対性理論を元に考えている…相対性理論が間違いだとしたら？光速度が実際は100km/sだとしたら？

「……………」

「……………」



「先生！ピラフ冷めちゃうよ」

もしも光速度が $100\text{ km/s}$ …考えられる。私の $180\text{ SX}$ なら $100\text{ km/s}$ を超える事も可能だ。

これで第一の条件、相対性理論の間違いによって光速度を超えることは出来た。だがタイムスリップにはもう一つの条件が必要になる…宇宙で行うことと言うのが条件だ。宇宙空間で光速度を超えることによって光が屈折し時空との歪みが生じる…

「……………」

「……………」

「先生…あの…ピラフ」

$180\text{ SX}$ で宇宙に行く事は可能か？

「……………」

「……………」

「先生…無視しないで」

$180\text{ SX}$ の馬力がおおよそ $195$ 馬力…

$1$ 馬力とは $1$ 秒間に $75\text{ kg}$ のものを $1\text{ m}$ 動かす力と言う。 $195$ 馬力つまり…

$1$ 秒間に $14625\text{ kg}$ のものを $1\text{ m}$ 動かすことが出来る。一般的に宇宙に行くスペースシャトルの重量が $20$ トン…単純にスペースシャトルを $1\text{ m}$ 動かす馬力は $1500000$ 馬力… $180\text{ SX}$ でこ

の馬力を現実のものに出来るのか？更にこれは重力を考えていない場合である…重力を計算に入れると…

「……………」

「……………」

「先生…私気に障ること言っただけなら謝るから…」

無理だ！どう考えても180SXで宇宙に行くことなど…だが現実  
に死んだはずの尼崎杏奈がいる…タイムスリップする第三の条件が  
あるのか？

「……………」

「……………」

「先生…」

いや待てよ…180SXには第二のエンジン…原子力エンジンがある  
としたら…

当時の日産社長が来たる核戦争に備えてある180SXに極秘に第  
二エンジンを搭載していた…この事は公に発表する事はなかった。  
そうその180SXこそが私の乗ってきた180SXだとしたら！

「……………」

「……………」

当時の社長は核戦争に陥ったら宇宙に避難しようと考えていた…1

80SXで！こう考えれば納得できる！180SXで宇宙に行く事も納得できるタイムスリップも納得できる！

「……………」

「……………」

新渡戸は科学的にタイムスリップを解明したことによって精神的に落ち着くことが出来た。そしておもむろに尼崎杏奈を見る…  
泣いている…何故だか分からないが泣いている…新渡戸は困ったように話しかける。

「あ、尼崎君…なぜ泣いているのかね？」

「グスン…グスン」

「お、おい！どうした？何かあったかね？」

「だ…だって…ピラフ作ったのに…先生話聞いてくれない…」

「はぁ？ピラフ？」

新渡戸はテーブルに目をやると美味しそうなピラフがふたつ並んでいた。

「ピラフ作ったのかね？美味しそうである！」

「うん…作った」

「え〜と…一緒に食べたいと思いか？」

「うん…思ってる」

新渡戸と尼崎杏奈は一緒にテーブルにつきピラフを食べる。外からのそよ風…テレビの音…心地いい…尼崎杏奈と一緒にいる時間は心地いい…ふたりの間には会話はないがそれも新鮮にさえ思えた…

この時間が永遠のものになればいい…そう思っていた…  
新渡戸は新聞に目をやるそこには…

1998年12月12日と書いてある…

10年前…やはりあの頃にタイムスリップしたのだった…

## 第8話 新渡戸の過去…第3章

新渡戸寅ノ助は困惑していた。なぜならベッドの上には死んだはずの尼崎杏奈がいるからだ…

新渡戸のタイムスリップの考えなど結局、仮説の域を超えない…それは本人も分かっている事である。ただ今分かっていることは死んだはずの尼崎杏奈が横に居るということだ。寝息を立て幸せそうに寝ている尼崎杏奈…

彼女との出会いは今から13年前に遡る…

当時、京大生として入学したての尼崎杏奈は作家志望の学生だった。京大に入学したのも芥川賞受賞作家、新渡戸がいたからだ。

よく尼崎杏奈は自分の書いた小説を新渡戸に見てもらっていた。そのたびに全否定されていたのだが…小説全てを否定し、人格まで否定された…

しかし尼崎杏奈はどれだけ否定されても小説を書き続けた。最初 は芥川賞受賞作家に自分の書いた小説を認めて貰いたい一心だったが次第に新渡戸という男に認めて貰いたいという気持ちの方が強くなり芥川賞などどうでも良くなっていた。新渡戸が気に入ると思う文章、小説を書いた。

そして徐々に尼崎杏奈は新渡戸に惹かれていったこんな男のどこがいいのか？人間とは分からないものである。

新渡戸にとって尼崎杏奈と言う女性は心安らぐ存在である。彼女は新渡戸という男を理解し受け入れてくれた…

初めてかも知れない…自分を受け入れてくれた女性、尼崎杏奈…永遠に、永遠に一緒に暮らそう…一生守っていく…そう誓ったはずだった…

誓ったはずだった…

翌日、新渡戸は台所からのぼる美味しそうな匂いに目を覚ます。パジャマ姿の新渡戸の目にはエプロン姿の尼崎杏奈が写るテーブルにはご飯、味噌汁、あじの干物、イチゴが置いてあった。

「あ！先生おっはよう」

尼崎杏奈が新渡戸にきずき愛嬌のある声でいった。だが新渡戸は「うむ」と一言、ドカッと椅子に着席する。さも当然のように着席する。新渡戸が箸を取ったのを見て尼崎杏奈も箸を取る。

「……………」

「……………」

「ど、どうかな先生？」

緊張の一瞬である。

「……………」

「……………」

「口に合わなかった？」

すると新渡戸は眼光鋭く尼崎杏奈を睨んだ。ゆっくりと口を開けていく。

「まず味噌汁のダシがあまりでていないな…君はダシというものが分かっていない。君は煮干しの腑を取ったか？天日干しにしたか？怠慢が見られる…次に干物であるが私は三重の吉田屋の干物しか食さない。これはスーパ－の干物だね？怠慢が見られる。今から取り寄せて来たまえ！あと全体的に味が薄いように見受けられる。こんな物食すことはできない…本当、君はどういう教育を受けてきたのかね？相手のことを思うという気持ちで微塵にも感じられない！親の顔が見てみたい物である！」

普通せつかく作ってくれた料理をここまでケチを付けられたら

「じゃあお前がつくつたら！」ってなるところだろう。そこは流石、尼崎杏奈である怒ることもなくただただ冷静に聞きメモをとる。新渡戸の性格を熟知しているのだ。こんなことで怒っていては新渡戸と付き合うことなど出来ない。新渡戸も別に本気でケチを付けているわけではない。内心嬉しいのだ。ただ照れ隠しで言っているようなもの…これも一種のコミュニケーション？…かな

「先生、でもお味噌汁前よりはおいしく作れるようになったでしょ？」

「20点…」

「ご飯だつて前よりはおいしく炊けるようになったと思うんだけどな？」

「13点…」

「イチゴ美味しいよ！」

「5点…」

いちいち料理に点数までつける男、新渡戸…でも悪気があるわけではない。これも新渡戸にとっては一種のコミュニケーションなのだ。朝食を食べた後、新渡戸は時計に目をやる。すでに8時を回っていた。新渡戸の出勤の時間である無言で立ち上がった新渡戸を背に尼崎杏奈は笑顔でこんなことを言った。

「先生、たまには私も180SXで送ってつてよ」

新渡戸の表情が変わる。

「ねえーねえーたまにはいいでしょ？」

新渡戸はプルプルと震え全身の血管が浮き出ている。

「私達付き合ってるんだからさーねえー？」

新渡戸の震えは頂点まで達し痙攣と言った方がいいだろう。高血圧の新渡戸には心筋梗塞の恐れさえもある。だが尼崎杏奈は続ける。



「一回ぐらい乗せてよ〜ねえ〜ねえ〜！お願い！ねえ〜ねえ〜ねえ〜ねえ〜ねえ〜」

猫のようにまとわりついている。そろそろか？

プツッ…

キレた…

断っておくが血管ではないよ！以下、新渡戸が言った罵声である…

「何を非常識なことを言っている！君と私は生徒と教授という関係だぞ！もし誰かに一緒に180SXに乗っているところを見られたら私の立場はどうなるのだ！噂がたちまち広がるぞ！私は学生に手を出したロリコン天才教授のレッテルを張られるぞ！私が積み上げてきた地位も名誉も粉々に壊れるだろう！君にその責任が取れるのか！」

「責任…とれないけど」

「だったら言うな！君はいつものように私と顔を合わせることなく登校すればいいのだ！わかったか！」

「はい…」

新渡戸はそれだけ言うのと部屋を後にする。尼崎杏奈が少し寂しそうな顔をしたように思った。新渡戸は車のキーを片手に階段を下りる…

駐車場には180SX…

「私の180SX…」

ホイール、ステア、マフラーを変えた以外は純正のタイプX…これでタイムスリップした…

やはりダッシュボードの中には自分名義の車検証がある。やはり間違いない、あの頃の180SXである…

キーを回す。重低音が心地良い…懐かしい…BLEITZの水温計を確認しシートベルトを閉める…ゆっくりとクラッチを緩めアクセルを踏み込む。辺りは耳をつんざく重低音に包まれたのだった。

こんな事を何日繰り返したことだろうか？

優しい尼崎杏奈とずっと一緒にいたい…

このささやかな幸せが永遠に続いて欲しい…

心から思う…

だが自分は未来を知っている…尼崎杏奈がどうなるのか…

この幸せを永遠の物にしたい…

だが一本の電話によりこの幸せが消滅することも知っている。

## 第8話 新渡戸の過去…第4章

1998年1月10日、忘れもしないこの日…

この日、新渡戸寅ノ助はいつもと変わらず起床し朝食を取る…目の前には尼崎杏奈が笑顔で見つめてくれている…何ら変わらない…いつもと変わらない光景がここにある。

朝食をとり新渡戸はテレビ取材を受けるために家を出る。

「先生気をつけてね！」

「うむ」

いつもと変わらない会話である。ちなみにテレビ番組『天才、新渡戸寅ノ助の真実』の取材：火曜9時からの特番である。どうでもいかそんな事…

取材は何を話したのか覚えてはいない。まあ常人には理解できないような高度な理論を話したことは間違いないのだが。

そして午後8時すぎ新渡戸はテレビ局を後にする愛車180SXの中から見る夜景がとても綺麗で美しかったのを覚えている。

夜の明かり…

ひとつひとつの明かりがとてもドラマチックに思え。なぜか帰らなくなかった。出来るのならこの場にずっといたい…この夜景を180SXの中から死ぬまで見ていたいとさえ思った。だが運命にはか

なわぬ…

これから起こる運命…受け止め切れぬ運命…逃げることはできない…

午後9時すぎ、新渡戸はソファ―に座りテレビを見ていた。尼崎杏奈はいない…夕食も置いてないテレビの音も聞こえないや聞いてはいない…

これから起こりうる運命を静かに待つしかないのだ…

……

あの時、水野直樹が言った言葉『先生、まだ引きずってるんですか？』

……

確かに彼の言うとおりかも知れない新渡戸寅ノ助の時は1998年1月10日で止まっているのかも知れない。自分はこの日から前に進んでいないのではないか？

……

……

彼女を受け止められない…  
この日を否定したい…

私は彼女の死を受け止められない…

彼女の死を…

「9時20分…」

新渡戸は時計に目をやため息をつく。新渡戸の表情はどこか淋しげで額を手で覆う…そこにはいつもの傲慢な新渡戸寅ノ助はいなかった。

神様のイタズラとも言えるような、このタイムスリップ…なにが目的？

考えても考えても答えなどでない。正直これから起こりうる出来事は新渡戸の人生の中で封印したい出来事である。

「……………」

「……………」

人は誰しも人生の中で失敗がある。消し去りたい記憶がある。大なり小なりあるのだ…

新渡戸寅ノ助にとって、尼崎杏奈とは消し去りたい記憶なのかもしれない…

「……………」

「……………」

人生で最初で最後の恋…

尼崎杏奈…

「……………」

新渡戸はただただ時が過ぎるのを待つのみである。テレビの音だけが虚しく耳にのこる…どれくらいこうしていただろうか？そして時計の針が10時を過ぎた頃、ついに新渡戸にとって止まった時間が動き出す…

それは一本の電話から始まった。

現在の時刻は11時を過ぎた。この時、新渡戸は尼崎杏奈の前にたっている。だがいつもの尼崎杏奈はそこにはいない…

彼女は全身を包帯でまかれ体中管を通してゐる。綺麗な体は擦り傷

やあざが見られる。

その横で中年を過ぎた男女が医師に詰め寄り何か訴えているのだが何を言っているのかわからない。尼崎杏奈の両親である

「……………」

「……………」

新渡戸に掛かってきた電話は尼崎杏奈が交通事故にあったという内容だった。受話器越しに救急隊員の切迫した状況が分かった。

その時尼崎杏奈が身につけていた手帳には両親と新渡戸の電話番号だけが書かれていたという。

両親は我が娘の変わり果てた姿を受け入れられず泣きじゃくる。

その日新渡戸と両親は病院に止まった。深夜3時を過ぎた頃、両親は尼崎杏奈の手を握り涙を流し眠っていた。

そして尼崎杏奈は新渡戸がいる事に気づきかすれた声でこういったのだ。

「先生…お願いがあるの

新渡戸は尼崎杏奈に近ずき手を握る。

「2人で…最後にどこか連れてって欲しい…」

「……………」

10年前の新渡戸はこのもおしでに断った。そして次の日尼崎杏奈は死んだ…考えてみたら一緒に旅行に行ったことも映画を見たことも遊園地に行ったこともなかった。デートと呼べるような事をしたことがなかった。



新渡戸は今でもこの事を後悔している。何故、尼崎杏奈の最後の願いを受け入れなかったのか？確かに瀕死の重症を追った患者を連れ出すなど非常識だろう。でも…尼崎杏奈は死ぬ…病院にしようがどこにしようが死ぬ…

ならば最後の望み…最初で最後のデートを叶えてあげるべきではないか？

新渡戸は尼崎杏奈の手を握り軽くうなずいたのだった…

## 第8話 新渡戸の過去…第5章

深夜の海岸線はとても幻想的で満月が海面に移りまるでひとつの絵画のように思えてならない…

真っ暗な海面で満月によって映し出される海平線…切り立った断崖絶壁…それは自分がドラマのワンシーンの中にいるかのような想像さえさせる。

新渡戸は尼崎杏奈をおぶりこの幻想的な光景を無言の中歩く。尼崎杏奈も無言で体を預けている…

今頃、病院内はパニックになっているだろう？瀕死の重症患者が突然いなくなる…医師、看護師…そして尼崎杏奈の両親…血眼になって探しているはずだ…こんな事をしでかしたら新渡戸自身も分かっている…地位も名誉も全て捨てる覚悟からの行動である。

そして2人は断崖絶壁を横に急斜面を降りる。何度もつまずきそうになりながら…

どの位こうして歩いていただろうか？2人は海がまじがで触れる砂浜で身を寄せあっている。尼崎杏奈はどこか目をぼんやりとさせこう言った。

「ありがとう…今までありがとう…」

「……………」

新渡戸は黙って聞いている。

「私のわがまま聞いてくれてありがとう…」

「……………」

「最初で最後のデート出来て良かった…今まで…本当…ありがとう」

「何を言っている…」

新渡戸は怒ったような口調で言った。まるで死んでいくようなセリフ…  
でも新渡戸は知っている

…  
彼女は死ぬ事を…

尼崎杏奈は泣いていた。新渡戸の体にも嗚咽ともとれるような声が振動となり体に伝わってくる。

「最初で最後なんて言うな…これから…デートなどいつでも出来る…」

「…ありがとう」

2人はまた黙り込み会話もない。いや会話などいらなかっただろう。言葉を交わす必要もないだろう。2人は波の音しかない海辺で身を寄せあっている。とても幸せな時間であった…

人は必ず人生における失敗と言うものが大なり小なりある。新渡戸は尼崎杏奈の最後の願いを聞いてやれなかったことが自分の苦しみに変わりトラウマにさえなっていた。この神様がくれたタイムスリップ…でも本当にこれでよかったのか？新渡戸本人にもわからない…ただ言えることは海辺で二人寄り添うことの幸福…本当に幸せだった。

尼崎杏奈と出会って4年デートと言うデートなどしたことがない。  
最後にデートと呼べる物が出来たと思う。

そして…

彼女は死んだ

心の恋人、 尼崎杏奈…

これからも私の心の中で生きつづけることだろう…  
最初で最後の恋人…

尼崎杏奈…とても幸せそいな寝顔をしている…

あなたと居ることですごく幸せだった……とても楽しかった……

尼崎杏奈……

『さようなら』

「……………」

「……………」

すでに辺りは海平線から太陽が顔を見せ始めた。新渡戸は意を決したように立ち上がり来た道を戻る。尼崎杏奈を抱きかかえながら……だが尼崎杏奈からは何の反応もない。

180SX……

結局、最初で最後のドライブになった。助手席の彼女はどこか幸せそうに新渡戸を見ているように思えた。今にも話しかけてきそうだがキーを入れた頃、新渡戸は無性に彼女と暮らしたアパートに戻りたくなった。何故かはわからない……ギアをローに入れアクセルを吹かす。辺りは耳をつんざく重低音に包まれる……

「……………」

「……………」

「……………」

それは緩やかな右カーブだった。新渡戸はブレーキを踏むことなくシフトチェンジを行う。

対向車線からはトラック…別に減速する必要もないと思う。

トラックとの距離が30M20Mと近づく。別に何の異変もない。

そしてすれ違う瞬間、なぜか新渡戸の視界にはトラックのバンパーが大画面で見えた。

そして……起きてはならないことが起こってしまったのだ…

「せ…

「ん…い」

「せんせ…い」

「先生！」

新渡戸が見た光景…

白いカーテン、チューブに繋がれた機器は自分に繋がっている…ここは？

「先生！先生！」

新渡戸の横に水野直樹？水野直樹である。新渡戸は訳が分からない。そしてきずいた。自分の体が動かないことを…機器からは緑色のラインが走っている。ここは…

「先生！わかる俺だよ！水野だよ！」

水野直樹が必死に言っている。

「水野君…尼崎杏奈はどうした？」

「え？」

水野の表情が変わった。何を言っているのか分からないような顔をしている。そしてこういった。

「尼崎杏奈？何言ってる…夢でも見たんじゃないですか？先生は俺とのドライブ中事故にあって1ヶ月寝たきりの状態だったんですよ！」

馬鹿な…私が今まで見てきた尼崎杏奈との生活は夢？あの海での思い出は夢？そんな…

新渡戸はこの状況を理解するのに時間が必要だった…無数の機器の音だけが虚しく耳に聞こえてきたのであった…



## 第8話 新渡戸の過去…エピソード

新渡戸寅ノ助は尼崎杏奈と一緒に住んでいたアパートにきていた。勿論、尼崎杏奈はいない…当然である彼女は10年前に死んだのだ。いるはずもない…

新渡戸が分かったことは自分が水野直樹とのドライブ中、運転ミスにより崖から転落したこと…そして1ヶ月間目を覚ますことは無かったこと。

ちなみに事故現場はこのアパートの近くだったらしい…

「……………」

「……………」

今言えることはタイムスリップなど無かった…全ては夢…自分が都合の良いように作り上げた空想の世界だということ…

やはりタイムスリップなど存在しなかったのだ…

「……………」

新渡戸は尼崎杏奈との部屋の前にたつ鍵は掛かっていなかった。いや壊れていた…まるで廃墟だな…と思った。当然と言えば当然かも知れない自分が生活していたのは今から10年前の事だ…  
新渡戸は扉を開け部屋の中に入る…

「……………」

そこで見た光景…

若干の埃があるものの当時のままだった。テーブル、タンス、書斎、キッチンにはまな板が置かれ横に包丁…下には鍋…書斎には自分の書きかけの原稿…アパートの外観とは似つかわしくまるで最近まで生活していたかのようなのである…

「……………」

新渡戸は尼崎杏奈が死んでからこのアパートに戻ることは一度としてなかった。それは尼崎杏奈の最後を悔やみ記憶を消し去りたかったからかもしれない。そして出来ることなら過去に戻りやり直したい…潜在的に頭の中でこう思っていたからタイムスリップと言うものを新渡戸自身の頭が作り上げたのかも知れない。

「……………」

新渡戸はテーブルにアグラをかく。昔、尼崎杏奈とここで食事をした。今にも『先生味噌汁どう?』…と声が聞こえてきそうだ。新渡戸はずっとずっとテーブルの前に座った。頭の中で尼崎杏奈との思いがよぎる。自分は何も変わらない…結局過去には戻れない…だから過去を悔やんでもしょうがない…

「…………?」

この時、新渡戸はある物に気がついた。それはタンスの上の段よりはみ出ている…

「原稿?」

タンスの奥より見える物…それは紛れもなく小説の原稿であった。小説タイトルは『ティーチャー』と書いてある

この小説はある女子学生と天才作家との恋愛を書いたものである。とても綺麗な文脈で作者の人柄がにじみ出ている。とくに恋愛における女子学生の心理変化の描写が素晴らしかった…だが残念なことにこの作品は未完のまま終わっている。

新渡戸はこの小説を読み終わるとタイトルに戻る題名『ティーチャー』の下には尼崎杏奈…と書かれてあった…

ここからは余談なのだが皆さん『A・A&T・N』…という作家聞き覚えはないですか？

そうこの作家…今年の芥川賞受賞作品『ティーチャー』を書き上げた作家のペンネームである。

だがこの作家は一度として公の舞台に立つことはなかった…そしてこの作品いこう小説を執筆することもなかった…

そうこのペンネームA・A&T・N…新渡戸寅ノ助と尼崎杏奈の頭文字である…

そしてこの小説の最後はこう終わっている。

『天国へのアンナへ…今までありがとう…そしてごめんね…私はあなたといることで幸せだった…』

あなたは今でも心の恋人です…』

日本中が涙した瞬間であった…

## 第9話 主食ポコチン、春の競作祭に参加する

深夜、新渡戸寅ノ助は自らの書斎に閉じこもりパソコンを眺めていた。

天才作家、新渡戸寅ノ助は何をしているかというところ『小説家になる』の春の競作祭に出す最新作を模索しているのである

主食ポコチン先生…知つての通り天才作家新渡戸寅ノ助のこのサイトのペンネームである。しかしいまだかつてこのサイトで新渡戸の作品を正当に評価されたことはない。新渡戸はサイトを通して本当の自分をさらけ出しているのだがなかなか凡人には理解出来ないようだ…

そして新渡戸が今一番欲しい物は芥川賞なんかではなくこのサイトでの評価…本当の自分…主食ポコチンを評価して欲しい…ただそれだけである。

「……………」

「……………」

推敲に推敲を重ねた作品だった…最高傑作と呼べる作品だった…新渡戸寅ノ助という天才作家本人が認めた作品だった…

……………名前：あ

あなたの作品は不快極まりないです。真面目に投稿している人達への侮辱です。投稿やめてください

文章：

作品：

出版：買わない

- - - - - 名前：ダヤン  
死ね！

文章：

作品：

出版：買わない

- - - - - 名前：メタカツ

僕は『東海風俗渡り歩き絵巻』という作品を投稿しているのですが、  
流石にアナタほど酷い作品じゃない！僕の作品みて勉強してみたら？

文章：

作品：

出版：買わない

- - - - -

数々の批判評価…さらに投稿から五分もたつと更に多くの読者から  
の批判評価が届く…

「……………」

「ふっ…下等な凡人には私の作品は理解する事は出来ないだろうな  
…ふっふふい…！」

こうは言っているものの新渡戸は気が狂いそうであった。今回の作  
品は絶対的自信を持っている…いくら下等生物といえどもこれだけ  
の批判…新渡戸のプライドが傷つくのも事実…膝はカタカタと震え  
血管が浮き出てくるのが自分でもわかる…この作品を批判した下等  
生物共に殺意が芽生えた瞬間である…

現芥川賞受賞作家新渡戸寅ノ助が絶対的自信をもって春の競作祭に  
出した作品…ここに紹介したいと思う。

題名：『精子にマヨネーズをかけてみた！』

作者：主食ポコチン

ドビュッシー！

「ああ…みんな死んでいくよー！」

ドビュッシー

「あつ隣のせいじ君も死んじゃったー！」

ドビュッシー

「みんなみんな酸で溶けてくよー！頑張れ！子宮までもうすぐだ！」

ドビュッシー

「えーみんなしんじやった？怖いよー！僕ひとりじゃだよー！二億匹もいたのに死んじゃったー」

ドビュッシー！

…以下省略

皆さんこの小説どう思いますか？ちなみにメタカツはこういうのは大嫌いです！でも新渡戸はこの作品のテーマを『自殺』だといっております。以下、作品の後書きです。

後書き：

自殺は年々増加する一方である。自殺の理由も様々…ある人はイジメを苦に、ある人は生活苦から、ある人は仕事がいやで…理由は様々であるがどの人達も共通して自己嫌悪に陥っていることは確か…今の世の中ストレスもさらに増えこれから自殺者が増加するかもしれない…

『自分なんて死んだ方がいい…自分は未完成な人間なんだ…』

そう思っている人もいるかも知れない…でも考えて欲しい。君たちは超エリートである。一回の射精でできる精子は二億匹とも言われている。そのたった一匹が子宮にたどり着き受精卵となるのだ。すなわち君達は

1 / 200000000

の戦争を勝ち抜いてきた超エリート精子なのだ。今の日本の人口は二億もいないが言ってみれば君達は日本一だ。この世に意味のない人間などいない…それが私の結論である。

主食ポコチン

皆さんも春の競作祭に参加してみてはいかが？

第10話 梅さんの裏切り…第1章（前書き）

物語にでてくる梅田洋平と言う人物は架空の人物です。



## 第10話 梅さんの裏切り…第1章

それは一通のメールから始まった…

「ば…馬鹿な…」

新渡戸寅ノ助にとっては受け入れがたい現実…

「……………」

この日もいつものように京大で講義をし帰宅をした。そしていつものようにパソコンを開く…目的はただ一つ、『小説家になろう』で小説執筆するためだった。

ところが…

……

投稿できないのだ。下等生物が書いた小説は見ることが出来ても小説投稿が出来ない。いまだかつてこんな事はなかった。新渡戸はパソコンの電源、ケーブルを何度も確認したが異常らしき物は見つからない。そしてふとパソコンを見ると一通のメールが届いていることに気づく。

このメールこそが新渡戸の精神を粉々に打ち砕くものである。ここにそのメールを記する。

—————5/1・9:30

件：『小説家になろう』運営ウメ研究所

私はウメ研究所代表、梅田洋平ともおします。誠に残念なのですがあなたの小説は多数の読者から批判があり勝手ながらサイトから退却させていただきました。

私も小説を拝見させていただいたのですが…まあお下品なことくだらないこと！特に春の競作祭の作品は酷く溜め息がでるかぎりでありました。私、以下他の利用者様は真面目に執筆している方が多数でありまして健全なサイト運営をするためには退却はやむおえない…と言うのが結論です。なお他の利用者様の小説を見ることは出来るので他の利用者様の小説をお楽しみください。梅田洋平。

—————

「……………」

「……………」

「うわあああー！」

新渡戸は涙を流し。何度もパソコンを強打した。まるで理性の働かない子供のように地を這いつくばり全身をかきむしった…

何がショックか…それは小説投稿できないのも一つだが。一番は梅田洋平に自分の小説を否定されたことである。

新渡戸が人生で認めた人間は二人。ひとり故、尼崎杏奈…そしてもおひとりは梅田洋平なのだ…

「う、う、梅さんがあー梅さんがあー！」

「ヒギヤアアアア！」

ウメウメ日記を誰よりも楽しみにしていた新渡戸…そうこれを読んだる君よりもだ！春の競作祭に投稿したのも梅さんが読んでくれるものだと思っただからだ。梅さんなら自分の小説が分かってくれる…

そう思っていた。

だが現実が違う。梅さんは自分の小説を『お下品！くだらない！』  
と言った…

あの最高傑作…『精子にマヨネーズをかけて食べてみた』までもく  
だらないと。

何時間も泣いた。そしていつしか涙は枯れはて新渡戸寅ノ助に残っ  
たものそれは…

## 『絶望』

そう『絶望』だけである『小説家になろう』がゆっいつ自分をさら  
け出せる場所だった。こんな素晴らしいサイトを提供してくれる梅  
さんに恋心さえ抱いていた…

だがもうこのサイトで小説投稿する事は出来ない…新渡戸は主食ポ  
コチンになることで自我を保っていた…もう主食ポコチンとして小  
説投稿は出来ない…

生きる糧を失ってしまった…

「死のう…」

『死』…究極の選択。これからどれだけ楽しいことがあるかが全てが無になる『死』

分かってくれとは言わない…たかがサイトが使えないだけで自殺なんて…でも新渡戸にとっては『小説家になるう』がそれ程までに重要な意味を持っていたのだった…

新渡戸は愛車のキーを回す。

ブッオン！

耳をつんざく重低音。R34…180sxから乗り換えたときこの車の凄さを嫌と言っほど実感した…これもいい思い出。

「さよならGTR…」

バケットから伝わる振動は新渡戸にとっては子守歌。この車を愛していた…今までありがとう。

京都大学…新渡戸の職場…車内から眺める京都大学は暗くどこか寂しげのようにも見えた。

「さよなら京都大学…」

ここでは色々な事があつた…尼崎杏奈との出会いもここだ。京都大学が無ければ尼崎杏奈とも出会わなかった…京都大学…今までありがとう。

新渡戸は京都の街を疾走する。暴走と読んでもいいかもしれない。R34で思い出の地を疾走する。金閣寺、清水寺、お茶屋…全てが思い出だ。そしてもう見ることもない…京都の夜景はとても美しく心を浄化させる…

「さよなら京都…そして今までありがとう」

新渡戸は涙を流しながら京都の街を後にしたのだった。

第10話 梅さんの裏切り…第2章 (前書き)

クドいようですが梅田洋平は完全なる架空の人物です。

## 第10話 梅さんの裏切り…第2章

湿った空気が肌に感じる街頭はあるものの薄暗く不気味な空気を一層強めるだけである。

ここは…

『富士が原樹海』

知つての通り自殺の名所である。

新渡戸寅ノ助は樹海沿いの国道に車を止め樹海の中を見ている…

「……………」

「……………」

当てもなく走り回った。そして行き着いた果ては樹海。いや樹海が新渡戸を呼んだのかも知れない…

新渡戸は車にキーを指したまま樹海の中へ歩みよる。その時ひとつの看板が目飛び込んできた。看板に書かれた文字―

『あなたが死ぬと沢山の人が悲しみます！もう一度良く考えてみて！』

「……………」

「……………」

「ふん…私にはもう生きる糧が無いのだよ…自分を表現する術が無いのだよ…私には生きる意味がない…」

多分地元の人が自殺防止のために作った看板だろう。だが今の新渡戸にとっては非常に虚しく思えた…

新渡戸は看板を横にガードレールを跨ぐ。目の前は漆黒の闇…じめじめとした湿気…圧迫感がある…明らかに外とは違う。生きた生物などいないように…ここが自殺の名所と言われる理由が分かる気がした…

「……………」

「……………」

新渡戸は手ごろな木を見つけると鞆からロープを取り出し木にくくりつける。ロープの先端は輪っか状に結ばれている。

新渡戸が人生の最後にした場所は国道から離れてはいない…朝方になれば人に発見されてしまうだろう。それは自分の死体が綺麗な状態で発見されたかったからである。新渡戸寅ノ助の最後のプライド…誇りからきた行動である。

「このロープに首をかければ死ぬ…私の人生が終わる…」

新渡戸はロープの輪っか部分を両手で持ち手に力を込める。



「さよなら……我が人生」

「……」

「……」

「……」

新渡戸が両手に力を込めた瞬間……

「……せ」

「ん……い」

「せ……んせ」

「？」

どこからか声が聞こえる。その声は悲鳴ともうめき声とも思えるような女性の悲しそうな声である…だがどこか懐かしい声…こんな場所に女性？ありえない。だが声はどんどん大きくなる。

『せんせ…い』

『せんせ…』

「だ、だれだ」

自然と恐怖はない。どこか安堵感さえ感じてしまう…新渡戸は手に掛けたロープを離し周りを見る…

「いない…誰も…」

誰もいない…ここには自分しかない…こんな場所…きつと気のせいだ。気のせいに違いない。そう思った。しかし今度は背後から明らかに聞こえた。

『先生』

「！」

新渡戸は後ろを振り向く…

言葉もでない…

信じられない…

新渡戸の背後に立っていた女性それは…

「尼崎杏奈！！！」

『……………』

信じられるだろうか：10年前に死んだ尼崎杏奈が目の前にいるのだ。新渡戸は口を閉じることが出来ずただただ尼崎杏奈を見た。そして尼崎杏奈は優しく新渡戸に語りかけるのだった。

『先生…死んじゃだめ』

「え？」

『死んじゃだめ…先生が死んだら…私悲しい…』

「……………だが私には生きる意味がもうないのだよ…誰も私の小説を理解してはくれない…あの梅さんさえも…」

『……………』

尼崎杏奈は急に悲しそうな顔になった。そしてこう言った。

『私は先生の小説好きだよ…精子にマヨネーズをかけて食べてみた、

チンコに鉛筆さしてジャンケンポン、それ行けボイン隊、ウンコ！  
……全てだ！好き！最高の小説だよ……分かつてある人は分かっ  
てるから……」

「……………」

『梅田洋平も所詮下等生物だった……それだけの事だよ……』

「梅さんが下等生物……」

『うん……下等生物……』

青天の霹靂とはこの事を言うのだろう。

自分は梅さんを過大評価していたのかもしれない。自分の生きがい  
である小説家になるうを提供してくれたことで自分はいつしか梅さ  
んを神として崇めていた……だが一度として梅さんを見たことも梅さ  
んの書いた小説を呼んだこともない……考えてみれば梅さんはサイト  
を開設しただけ……所詮梅さんも自分の小説を理解できない下等生物……  
そう考えると死ぬことなどどうでも良くなってきた……新渡戸は顔を  
上げる……ところが

「尼崎杏奈……」

いない……さっきまでいた尼崎杏奈が消えた。それと同時に自殺願望  
がなくなり梅さんに殺意が芽生え始めた。

新渡戸は走った！

「梅田洋平……許さぬ……下等生物が私の自由を奪うなど……」

新渡戸は走った！

「ただではおかぬ！梅田洋平を我が天才的頭脳でさがだし問い詰めてやる！」

新渡戸は走った！

「梅田洋平…貴様に私の小説が分かってたまるかぁー！」

新渡戸は車に乗り込み据え付けのノート型パソコンを手に取った。直ぐに『小説家になろう』を開き片っ端からウメウメ日記を読みあさる！

「貴様の居場所を突き止めてやる！」

これだけである。今の新渡戸を動かしている物は梅さんへの執念…直接主食ポコチンをサイトから外した真意を突き止める！この思いだけが新渡戸寅ノ助を動かす。そしてウメウメ日記で得た情報

・梅さんは大阪在住

・梅さんは昨年のバレンタインデーで梅チョコなるものをもらった

・梅さんは今年から大学院生

・SOUND HORIZNにハマっている

R34 GTRは爆音とともに走り去っていった…

## 第10話 梅さんの裏切り…第3章

難波大学、学校長室にてー

「に、新渡戸様あ言ってくれば私から出向きましたのに。あつ！  
これ難波モナ力ですーウチの名物何ですーイヒヒ…」

「……………」

新渡戸の前にはクツソまずそうなモナ力が置かれた。

ここは難波大学、学校長室。この新渡戸の前にいる胡散臭いハゲオヤジが学校長だ。新渡戸がこの学校に来た理由はひとつ…

「で…新渡戸様あ…ご用件は何でございましょうか？」

「うむ…」

お茶をすする新渡戸…学校長は緊張が隠せない。それもそのはずである、あの新渡戸寅ノ助が目の前にいるのだ。人類の至宝、生きる伝説と賞される天才新渡戸寅ノ助が…今や新渡戸の一言によって世論が動かされる程である。対応によっては難波大学の今後が決まると言っても過言ではない。そして新渡戸はお茶を置き学校長を睨みつける。

「この大学に梅田洋平と言う男が在学しているか確認したい」

「は？」

「梅田洋平だよ…いるのかいないのか今すぐ調べたまえよ！」

「は、は、はいー！」

学校長は良く分からない…梅田洋平と新渡戸なんの関係があるのか？まあそんな事を問いただす気はない…なんてつつたつて絶対的命令だから！

学校長は秘書を呼びすぐに梅田洋平の在学記録があるか調べるよう指示をした。

「す、すぐに調べられますから…そ、それまで難波モナ力でも…イヒヒ…」

「うむ…」

「最上級の丹波の小豆と静岡の抹茶が二種類なかに入ってるんですよ…おいしいでしょ？」

「不味い！」

ドサッ！

新渡戸は一口食べると残りは箱ごとゴミ箱に捨てるのだった。

その頃学校内では新渡戸の噂で混乱状態になりつつある。女生徒は股間を濡らし、男子生徒は嬉しさのあまり発狂…そしてあの男の耳にも新渡戸来客の噂が流れていった…

小説研究室にいる男…

全身黒ずくめの男…右手にはベルサーチの時計が光り輝く。メガネをかけ端正な顔立ちである。そうこの男こそが『小説家になろう』を運営している梅田洋平、通称梅さんである。梅さんは新渡戸来客の噂を聞き興奮を隠せないでいた。

「本当か！あ、あの新渡戸寅ノ助が来てるのか？あ、あ、あの人類の至宝、生きる伝説新渡戸寅ノ助が？」

「あくまで噂っスけど」

「あ、あ、あの新渡戸寅ノ助が！でも何で？難波大学になんか用でもあるのかな？」

「さあ…詳しい事は分からないっス」

新渡戸寅ノ助は作家を志す者にとっては神のような存在である。この梅さんも例外ではなく新渡戸を神として崇めている。梅さんはまるで恋する乙女のような虚ろな表情をしているのだった。

ここで話を戻そう。

学校長室—————

秘書と学校長がなにやら耳打ちをしている。どうやら在学記録が調べ終わったようだ。学校長は不気味な愛想笑いを浮かべ新渡戸を見た。新渡戸はというと腕を組み憮然とした態度で睨み付けている…



やはり天才と賞される人物の眼力は凄いな… と思った。学校長は当たり前障りのないように最大限の注意を払い新渡戸に報告する。

「え… 梅田洋平はうちの学生です… イヒヒ… 文学部の学生で小説研究部、部長をやっているようですが… イヒヒ」

「ほう… でどこにいるのかね？」

「あの… 梅田が何か気に障る事で…」

「貴様の発言など聞く気はない！ 貴様は質問に答えるだけでいい！」

「は、はいー！ 今は小説研究室にいるようですー！」

「案内しろお！」

「はいー！」

学校長と新渡戸は学校長室を出る。そこには多くの学生が詰め寄り。新渡戸が来たことによって興奮は最高潮に達した。

悲鳴にも似た歓声…

新渡戸には気にもとめない…

興奮の余り失神する学生… 新渡戸は気にもとめない。今の新渡戸には梅田洋平しか眼中にない… その時ひとりの女子学生が新渡戸に近ずいてきた。

「あ、あ、あの！ 先生のファンですう握手してください！」

「どけえええー！」

女子学生は涙を流したのは言うまでもない。仕方ない事である。  
今の新渡戸には梅田洋平しか眼中にないのだから…

新渡戸は学校長と共に階段を上がり小説研究室に向かう…

その頃、梅さんはこの異常なまでの状況に歓喜していた。

「こ、この歓声！間違いないよ！新渡戸寅ノ助が来てるんだあー！」

「あわわ…先輩…俺ちびりそう…」

小説研究室では梅さんと梅さんの後輩が手を取り歓喜していた。

神様がいる…

新渡戸寅ノ助がいる…

この嬉しさ分かるだろうか？それはギターが好きな人がエリックプ  
ラクトンに会う感情に似て…

さらに梅さんの興奮は収まらない。

「俺生きてて良かった…本当良かった…もう死んでもいい！」

「先輩！一緒に見に行きませんか！」

「な、な、何をおこがましい！神様を見るなど！そんなこと…俺は  
神様の近くにいるだけで幸せなんだ！」

梅さんと梅さんの後輩は抱き合いこの名言を叫んだ。

「我が人生に一片の悔いなしー！」

その時…

ガラッ！

「！」

「……………」

「……………あ、あ、あう」

扉が開き。新渡戸がいる…神様がいます…嬉しくて嬉しくてたまらない。さらに新渡戸は梅さんに近ずいてくる。梅さんの瞳からは大粒の涙…体の震えが止まらない。

生きてて良かった…

「貴様がぁ梅田洋平かぁー！！！！！！！！！！」

突然の罵声…これが新渡戸と梅さんの出会いであった。

## 第10話 梅さんの裏切り…第4章

「貴様が梅田洋平かぁー！！！！！！！！！！」

「ヒ、ヒイ！」

突然の罵声である。小説研究室の空気が一瞬にして凍りついた。学  
校長はオロオロと動き回り。当の本人、梅さんは分けが分からず震  
えている。でも…少しうれしかった神様、新渡戸寅ノ助が自分の名  
前を呼んでくれたから…

ここでひとつの疑問が生まれる何故、新渡戸寅ノ助は梅田洋平と言  
う自分の名前を知っているのか？

「に…新渡戸さん何故俺の名前を？」

新渡戸は急に不気味な笑みを浮かべる。小説研究室は更に凍りつく  
そして得意気にこう言った。

「フン！ウメウメ日記に大阪在住、今年から大学院生と書いたのが  
運の尽き…私は天才だ！大阪の大学を調べまくったのだ！そしてよ  
くよく見つけることができた！」

「あの…お取り込み中すいません…イヒヒ…うちの梅田が気に障  
ることです…」

「貴様は黙つとれえ！」

「……………」

「……………」

学校長は顔面蒼白…石のように固まり動けない。新渡戸の怒りに触れたと思った。自分の将来がどす黒い物になると思った自分の築き上げた地位、名誉が…

ああ…

明日、梅田洋平を退学にしよう…

難波大学学校長と言う権力が…

明日、難波モナ力を持って新渡戸に誠心誠意を込めて謝ろう…

あつ！でも難波モナ力不味い！って言ってたな…

…

…

退職金…いくら貰えるかな？

…

「あわわ…俺が新渡戸さんに何をしたと…」

魂の抜け殻のように立ち尽くす学校長をよそに梅さんは恐怖にののいている…そして新渡戸は梅さんに直訴するのだ！

「貴様あ！このごに及んでシラを切る気かあ！」

「いや…だから俺が何を…」

新渡戸は梅さんの胸ぐらを掴み力を込める。梅さんは数回咳き込んだ…

「貴様はなぜ主食ポコチンをサイトから外したのだあ！貴様のような下等生物にそんな権利があると思ってるのかー！」

「は？」

梅さんは新渡戸の言っていることが理解出来ない。主食ポコチン…確かに知っている『小説家になろう』でおげれつなとてつもなく程度の低い作品を投稿する作家だ…その余りに下らない作品は他の読者に不快感を与え前からブラックリストに載っていた作家…で新渡戸と何の関係がある？いやそもそも天才新渡戸の口から『主食ポコチン』と言う単語がでるなど想定外な事である。

「あの…新渡戸さんには何の関係もないと…」

「貴様あ！」

ガンッ！

新渡戸の拳は梅さんの頬を殴り梅さんは床に転がった。唇は軽く切れ涙が流れる。

分けが分らない！

なんで殴られなければならないのか分けが分からない！あまりに理不尽！梅さんもカツとなる！

「お言葉ですが新渡戸さん！アナタと主食ポコチンは何の関係もないでしょう！」

「おおありだあ！」

「は？言ってる意味が分かりかねますが！」

「主食ポコチンと新渡戸寅ノ助はなあ……」

⌋  
⋮  
⌋

⌋  
⋮  
⌋

「同一人物なんだよお——！！！！」

!!!!!!!!!!!!

「……………」

「……………」

「う、嘘だ……」

梅さんは新渡戸の言葉が信じられない……いや信じなくなかった。梅さんは新渡戸寅ノ助と言う大作家を敬愛している……新渡戸の作品は全て読んだ。一方、主食ポコチン……この作家は梅さんがもつとも毛嫌いする下ネタを平気で投稿する作家……  
新渡戸寅ノ助と主食ポコチンが同一人物……そんな……  
梅さんにとっては受け入れがたい現実……梅さんは新渡戸の顔を見ることが出来ずただただ下を向いていた。

「分かるかね？主食ポコチンを否定するという事は新渡戸寅ノ助を否定するということ……」

「……………」

「君のすることはひとつしかない……分かるね？今すぐ主食ポコチンの小説投稿を認めなさい……」

「……………」

「……………」



「……嫌です」

「ほう…新渡戸寅ノ助を否定すると？」

「いや 俺は今でも大作家新渡戸寅ノ助を敬愛している…でも主食ポコチンの作品は小説として認めない…小説家になるうは俺のサイトだ…サイトの全権は俺にある…」

「……………」

梅さんは天才新渡戸を睨む。初めてかも知れない真っ直ぐ新渡戸を睨む男は。そして新渡戸はため息をつき呆れたようにこういった。

「君も小説家の卵なんだろう？小説が書けなくなってもいいのかね？いやそれだけじゃない君はこのままだと一生、新渡戸を否定した男とレッテル貼られてもいいのかね？この年でホームレスでもいいのかね？」

「……………」

「もし君が私の言うことを聞かないのなら私は全権力を持って君を潰す」

「やめてくれ！」

「……………」

「……………」

横から突然の怒鳴り声。学校長である…前進を震わせ、こぶしを強く握り締める。だが目はどこか力強く先程までとは様子が違う。

「新渡戸さん…梅田洋平は私の夢なんだ…洋平の才能を潰さないでくれ」

「父さん…」

「とう？…なるほどな…貴様ら親子か…そして権力よりも親子愛をとると？笑わせてくれる…」

そう学校長は梅さんのオヤジだったのだ。梅親子は新渡戸を睨みつける。そこには先程までの情けない学校長はいなかった…新渡戸は最初は黙っていたが諦めたようにこう言ったのだった。

「ふん…わかったよ貴様等は私の全権力を持って叩き潰す！難波大学を潰し小説になるうを潰す！新渡戸に逆らうとどうなるか覚悟したまえ」

「……………」

「……………」

新渡戸はふたりに背を向けその場を後にしようとする。もう何を言っても無駄だと思ったのだ。ドアノブに手をかけた時だった。

梅さんが声を荒げた…

## 第10話 梅さんの裏切り…エピソード

「待て新渡戸寅ノ助！」

「……まだ何か？」

「……………」

梅さんは黙り込む。学校長は梅さんの肩を叩いた。その笑顔がとても印象的で…学校長は優しいオヤジの顔だ。梅さんは口をへの字に結び新渡戸を睨みつける。だが次に口にする言葉が思い浮かばない。

「…言いたいことがあるならはつきり言いたまえよ！」

「……………」

「ふん…無いのかね？じゃあこれで失礼するよ」

「ま…待て…よ」

「……………」

「お…俺と…俺と勝負しろお……………！！！」

静まり返る。学校長も息子の思いもよらない発言で固まっている。勝負？何を？人類の至宝新渡戸寅ノ助と勝負？新渡戸は呆れたように言い返す。

「ふつ…勝負？人類の至宝である私と？気は確かかね？でいたい

何の勝負をする聞かね？」

「今回の芥川賞…どちらが受賞するか…受賞したほうが勝ち…と言うのはどうか！」

「ほう…本気でいつてるのか？天才作家の私と小説勝負？勝算があるとも思ってるのか？」

「ある！もし俺が勝ったら小説家になろうから主食ポコチンを排除する！もし俺が負けたら煮るなり焼くなり好きにしたらいい…好きなだけ主食ポコチンで投稿したらいい…」

口から出任せだった。自分でも勝算などないと思っている。ただこのまま何もせず新渡戸の好きにさせるのは嫌だった。負けるとわかってる勝負をするのだ。新渡戸は鼻で笑い勝負を受けた。

自分でも分かっているよ…

無名の作家が天才作家に叶うはずがないことぐらい…

神様に叶うはずがないことぐらい…

わかってる…

2008年7月7日：芥川賞受賞作品発表当日：

満員の観客、今年の芥川賞は世間の注目をあつめている。最終候補作品はふたつ…ひとつめは常連新渡戸寅ノ助の『樹海に生きる猫』

そしてもうひとつ…

無名作家の作品である…こんな作家専門家でさえも聞いたことがない。

受賞候補作品『ふたつの心』作者名、梅田洋平

前評判は新渡戸有利と言われているが専門家の中でも意見が真っ二つに別れる。それ程までに甲乙付けがたい作品…ひとつ言えることはふたつとも素晴らしい作品だと言うこと。

司会者が壇上に立ちマイクを持つ。

静まり返る会場。

「え、これより今年度芥川賞受賞作品を発表します」

「……………」

「……………」

「……………」

「今年の受賞作品は……………」

「ファー！ファー！ファー！」

…

会場は歓声につつまれた…

受賞作品はあえてここに記することはない。ただ『小説家になる  
う』はいままでとなくにも変わらず運営されていること…

そして主食ポコチンも元気に毎日小説投稿されている事…

第11話 気持ちよかった?じゃね (前書き)

新渡戸がシーフドライス先生の『一休さん』に影響を受けて書いた作品です。よかったらこのおげれつ作品読んでやってください。

## 第11話 気持ちよかった？じゃね？

むかし、むかし一休と右衛門と言う男がおったとな…

「一休殿！この橋を渡と一休殿お勧めの遊郭『ロイヤルクラブ姫』があるのですね？」

「はい！あります！とうとう右衛門さんも遊郭デビューですね？あつ指の爪は切ってきましたか？」

「勿論でござる！」

右衛門は胸を張って答える。遊郭に行く前に爪を切る…まあ基本的なことです。この時右衛門は童貞。この年で童貞だと性欲の塊になり今でもイチモツはいきり立っている…一方、一休さんは年下ではあるが巷では遊郭の達人と知られ吉原を知り尽くした男！性におけるテクニクで右にでる者はいない…

2人は橋を渡と今回の目的地ロイヤルクラブ姫が見えてきた。

「ここがロイヤルクラブ姫…」

「そうです。ここが中級店でありながらNS、即即を売りにする優良店！さあ右衛門さん入りましょうか？」

ふたりはお店の中に入るボーイに入浴料1両をはらい待合室に案内される。その間一休はボーイと何やら打ち合わせをしている右衛門は今回初遊郭と言うことで泡姫選びも全て一休に任せているのだ。テーブルにはウンケル（のような物…）が置いてあるので飲んだ。



「右衛門さん私の顔で待ち時間短縮しましたよ…あっ！お風呂には入ってきましたよね？」

「え？ここで入るんじゃないんですか？」

急に一休は険しい顔になる

「私が書いた注意事項よんでないのですか！この店は部屋には行ったら即プレイが始まります！その前にイチモツを綺麗にするのです！そういう気ずかいが姫との関係を縮めるのです！今からトイレで洗ってきなさい！」

右衛門しょぼんとしトイレでイチモツを洗う。この時間が虚しい…  
右衛門は待合室に戻ると既に一休の姿はなかった。どうやら先に案内されたようだ。不安になってくる。そして…

「お客様ご案内です」

緊張が最高潮に達する。胸ポケットから一休からの指南書を取り出す。

・ひとつ…姫も初対面で緊張しているものである明るい会話がふたりの関係を縮める…

『明るい会話！明るい会話！』

右衛門は心の中で何度も呟いた。そして姫と御対面

かわいい…現代で言うところのロリギャル系である。右衛門はもう一度指南書を読む。姫は不思議そうに見ている。姫の目の前で指南

書を広げる右衛門：笑顔などなく顔がひきつっている。

「え〜と…明るい会話会話…え〜！今日はいい天気でござる〜え〜  
…明日は雨でござる〜」

「は？」

姫は目が点になっている。まるで罪状を読み上げているようである。

「え〜…今日はいい天気でござる〜」

「は〜？お兄さんマジウケるんですけど〜！会話メモってるみたい  
な？超ウケ！てか早く来い！………みたいない？」

右衛門は姫に手を持たれお部屋へと誘導される。心の中では『明る  
い会話できたでござるかな？』と一抹の不安を掲げながら…

プレイルームにて――

「あ、あう！」

お部屋に入ると姫はいきなり右衛門の服を脱がしにかかる。なる程  
これが噂の即即プレイか…！とここで右衛門は急に思い出したよう  
に一休からの指南書を開けた。

・ひとつ…即即が開始されたら

「待合室で小便したから汚いよ〜洗ってからでいいよ〜」…！と気  
ずかいを見せるべし！そおいう気ずかいが姫との関係を縮める！

「え〜と…ま、待合室で小便したでござる〜…え〜…汚いでござるからでして…え〜…」

「は？てかメモぐらい覚えろ！みたいな？仕事だからみたいな？オラッ」

姫は右衛門のイチモツを触った。次の瞬間…

「あーギャッ！」

「……………」

「……………」

「……………」

「ウケるー！…もうイツたー超ウケるんですけど！早すぎ！みたいな！」

「……………」

「マッジにー！てかイク前に何か言え！みたいな〜！」

「……………」

「……………あ…チョット言い過ぎたみたいな…とりあえずマッといこか？…みたいな…」

右衛門は泣いていた。こんな小娘にバカにされたと思い泣いていた。

マットにてーーーーー

・ひとつ…マットは姫によってもっとも差がでるプレイです。完全受け身になり快樂にひたるべし！

右衛門は一休の指南書のに従い受け身に徹する。右衛門の体の上を縦横無尽に滑る姫。必死にこの快樂に耐える。

「はい！仰向けになれ！みたいな！」

姫の言うとおり仰向けになる。おお！この方が視覚からも刺激が加わり快樂が倍增するでござる！右衛門は必死に快樂に耐える。またすぐイッたらこの姫にバカにされると思ったから。

ジュシャアー！

まるで鞍馬である。姫は両手首を軸に物凄い勢いで回転技を繰り出している。快樂が倍增される。

『田舎のお婆ちゃんを思い出すんだ！』

右衛門は必死で違うことを考え目をつぶる。ところが…

「アヒョー！」

「……………」

「……………」

「……………」

「ウケるんですけどー！ー！またイツたー！みたいな！入れる前みたいな！てか本気だす必要ないー！みたいな！」

「……………」

「早くて粗チンみたいな？」

「……………」

「てか童貞？みたいな！あつ！ちょっと言い過ぎみたいな感じ？」

「もついい……」

「は？だから謝ってる！みたいな！てかベッド行かないみたいな！」

「もついい！」

「……………」

「……………」

「あつそ！じゃあひとりでスねとけみたいなー！ひとりでオナツとけみたいな！」

こうして右衛門の遊郭デビューが終わった。最悪の一日。二度とおなごには手を出さないと誓った。セズリの方がいいと誓った。

これほどまでの屈辱初めてだった！

お店をでると一休が既に待っていた。一休の顔は赤く染まり焦点が会っていないようだ。右衛門は一休を睨む。

『何がお勧め店だ！貴様のせいで気分は最悪でござる！』…っと思つた。一休は右衛門にきずくと

「メツチャえがつた〜！」とニヤニヤしながら言つのであつた。

殴つたるか！…と思う右衛門であつた。

めでたしめでたし…

読者様へご報告いたします。

今まで読んでくれた読者様ありがとうございました。

当分、『小説家になろうでウンコという作品を書いたが私は天才である』をお休みする事にいたしました。

理由として正直ネタが思いつかなくなってきた事。それとこの作品は非常に書きにくい事。

ヘビメタ喫茶の時はネタはいくらでも思いついたのですが…

個人的にはもつと批判的評価がくるかな？と思っていたのですが意外に來なかつたです。まあ氣に入らなかつたら評価も普通しませんがものね…

裏話です…

この『小説家になろうでウンコという作品を書いたが私は天才である』はある作家様の作品を見てかこうと思いました。

その作家様はお堅い職業についている方なのですが作風はお下品なものも多く。

『ボイン隊、ウンコにマヨネーズをかけて食べてみた…』

「……………」

正直、賛否両論でしょう下品、くだらないと思う人もいるでしょう。でも私はこれほどインパクトを受けた事はありませんそれと同時に作者様の人柄も見たような氣がします。

きつと作者様は真面目な方です。そして全てに置いて満足する事は

なくいつもフラストレーションを持っている方……と思います。

私はこの顔も知らない作者様に憧れてしまいました……

最後に――

今までありがとうございました。また新渡戸寅ノ助をかける時がきたらよかったらまた読んでください。

文字つめです

[illegible]



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7330d/>

---

『小説家になろう』でうんこと言う作品を書いたが私は天才である

2010年10月10日15時07分発行